大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.61　　2012. 10. 1.

目次

９世紀の国際交流	1
2011(平成23)年度「指定研究」等研究経過報告	2
2012(平成24)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧	11
2011(平成23)年度「一般研究」研究結果概要	12
海外学会参加報告・海外研究調査報告	32
国内研究調査報告	42
共同研究及び公開研究会報告	43
公開講演会報告	44
彙報	45

９世紀の国際交流

真宗総合学術センター長
真宗総合研究所長　浅見直一郎

今年（2012年）の９月中旬、草野学長を中心とする訪中団の一員として中国の北京を訪れた。ちょうど中国国内の反日デモが高揚し、頂点に達した時期である。反日運動のようすは日本でも盛んに報道されていたから、「実はあのとき北京におりまして」と言うと、ほとんどの人が興味を示していろいろと質問してくる。

北京は広い街で、マスコミの報道は最も激しい部分を伝えるから、北京に滞在していたといっても、デモを見たこともなければ、危険な目にあったこともない。念のため日本人単独では外出しないように、とは言われたものの、私たちの滞在していたホテルの周辺は全く平穏で、いつもの賑やかな北京であった。

ただ、テレビの報道にはすさまじいものがあった。多くの頻道（チャンネル）が、かなりの時間をさいて魚釣島（尖閣諸島）の問題をとりあげ、アナウンサーやキャスターだけでなく、国際問題の専門家や大学の教授などが続々と登場して「今回の日本の侵略行為がいかに不当であるか」を激しい口調で語っていた。中国では大半の人々がこのテレビを見ているのだ、と思うと恐ろしい気がした。

そういう情勢であっただけに、今回訪問した中国社会科学院歴史研究所と故宮博物院が、私たち一行をたいそう歓迎して下さったことは、実にありがたいことであった。９月末に歴史研究所の研究者３名が予定通り本学に来られ、協定通りの交流を継続できたことと合わせ、喜びまた安堵している。

一連の出来事を経験する中で思い出されたのは、平安時代の僧、慈覚大師円仁（794～864）のことである。838年に遣唐使の一行として唐に渡った円仁は、五台山への巡礼、長安での勉学などを経て847年に帰国し、その後は第三世の天台座主となるなど宗教界の中心人物として活躍する。『入唐求法巡礼行記』はその旅の克明な記録である。

遣唐留学僧の旅は苦難の連続であった、という印象がある。確かに渡海は命がけであり、中国に着いてからも多くの苦労があったに違いないが、一方で円仁は彼の地でさまざまな親切に恵まれたことを『巡礼行記』に書き留めている。

たとえば、山東半島のつけ根にある青州という町では、節度判官という地方政府の要職にある蕭慶中という人物から鄭重なもてなしを受けている。円仁によれば、彼は仏教に理解があり、仏教についての議論を好んだ、という。また、太行山脈東麓の行唐県に程近いある村では、通りがかった旅の僧侶に食事を提供する篤信の人物に出会う。ここは五台山に近いので、巡礼僧の数は少なくなかったと思われる。

円仁の留唐で忘れてはならないのは、新羅人たちから受けた支援である。唐王朝は世界帝国と言われるように、国際的な物資の交易と文化の交流の舞台であった。そのうち中国以西の、いわゆるシルクロードでは、ペルシア人やソグド人など、西アジア・中央アジアの出身者が活躍したことは広く知られているが、東方でそれに相当する役割を担っていたのが新羅人である。唐国内にはかなりの数の新羅人が住んでおり、新羅人の居住区を形成している町もあった。彼らの活動ぶりが、ほかならぬ円仁の記録によって知られるのであるが、円仁はこの在唐新羅人たちに大変な世話になっているのである。

もともと短期留学の予定だった円仁が中国で長期に勉学できたのも、五台山についての情報を得て巡礼に向かうことになったのも、新羅人たちの助けがあってのことであり、面倒な旅の手続きについても援助を惜しんでいない。彼らの支援がなかったならば、円仁の中国留学はかなり貧弱な内容のものとなっていたことは間違いない。そして、帰国後の円仁が果たした役割の大きさを考えれば、この在唐新羅人たちの厚意は、日本の歴史に大きな果実を実らせた、と言ってよいであろう。

古代の日本と新羅の関係は決して良好ではなかったとされるが、しかしそれは国と国とのレベルでの話である。当時にあっても、政治とは別の価値基準に生きる世界があり、人と人との交流が営まれ、豊かな実りをもたらしていた。そのことは、現代を生きる私たちにとって、この上なく大きな励ましとなるであろう。

2011(平成23)年度「指定研究」等研究経過報告

「建学の精神」教育推進研究

大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長　教授　草野 顕之
（日本仏教史／中世・真宗史）

【研究目的】

本研究は、「建学の精神」の具現化を課題とし、これについて具体的には以下の３つの視点から研究を推進するものである。

①「建学の精神」の現代的表現化
②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

ここに言う「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」（明治34年、移転開校式）と、第３代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」（大正14年入学者宣誓式訓辞）を指す。

研究の視点①では、本学が今日まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指す。両訓辞は、それぞれ「私立学校令（明治32年公布）」と「大学令（大正７年公布）」における宗教教育に対する厳しい制約のもとで公開されたものである。ここでは、そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証し、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について、検討していくことが期待される。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ（文学部）」あるいは「仏教と人間Ⅰ（短期大学部）」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討を進める。現在同科目は、主に真宗学または仏教学を専門とする専任の教員によって、「仏教と現代」（短期大学部では「仏教と人間」の科目名）という共通テーマのもとで行われている。しかし、授業内容や到達目標などに関しては統一がとれておらず、大学共通科目としての教育の質は、担当教員の工夫と裁量に依存した形で行われている。ここでは、これまでの「人間学Ⅰ」教育の歴史を十分に踏まえたうえで、いかにして「建学の精神」を体現する科目として、教育内容を共通化できるかを、共通資料の作成を通して具体的に検討していくこととする。

視点③では、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指す。現在本学では、文学部９学科、短期大学部２学科で、それぞれのカリキュラム理念を掲げた教育を行っている。今後ますます学科ごとのポリシーの明確化が進む中で、いかにして「建学の精神」との関連を保ちつつ専門教育を行うことができるのか、十分な検討が必要とされる。ここでは、各学科の教育理念を念頭に置きながら、建学の精神をどのような形で反映させることができるのか、検討を進めるものとする。

【活動報告】

本年度は、３月23日開催予定の研究会を含め、全体での研究会が９回（公開４回）、調査のための出張が１回、その他適宜事務連絡会議を行った。詳細は以下の通りである。

第１回研究会
◇2011年５月10日㈫　16：30～17：50
場所：博綜館３階　H303教室
議題：①建学の精神の具現化について
②研究員・補助員の顔合わせ
③2011年度前期、全体会議の日程調整
備考：研究代表者による研究班の課題説明

第２回研究会
◇2011年６月９日㈭　16：20～17：50
場所：博綜館５階　第５会議室
議題：清沢満之・佐々木月樵の言葉が「建学の精神」に定められた背景
形式：公開研究会
講師：一楽真氏（大谷大学教授）

第３回研究会
◇2011年７月７日㈭　16：20～17：50
場所：響流館４階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：「建学の精神」具現化に関する討議

第4回研究会
◇2011年7月28日㈭　16：20～17：50
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：「建学の精神」具現化に関する討議

第5回研究会
◇2011年9月22日㈭　16：20～17：50
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：「建学の精神」具現化に関する討議

第6回研究会
◇2011年11月2日㈬　16：30～19：00
①公開研究会
場所：響流館3階　マルチメディア演習室
講師：磯前順一氏（国際日本文化研究センター　准教授）
テーマ：「明治期における「宗教」という言葉の位相」
②討論会
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：①を踏まえて、磯前氏と研究員との討論会

第7回研究会
◇2011年12月1日㈭　16：20～17：50
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
形式：公開研究会
テーマ：「宗教教育推進研究」に関する基調報告
講師：関口敏美氏（大谷大学教授）

第8回研究会
◇2012年2月14日㈫　14：00～15：30
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：本年度総括

第9回研究会
◇2012年3月23日㈮　10：30～12：00（予定）
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
テーマ：「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究―「心の教育」の所在を探る―」研究成果報告
講師：山内清郎氏（大谷大学准教授）

出張調査
◇2011年11月16日㈬～17日㈭
調査員：研究員　木越康・西本祐攝
調査先：西願寺（広島県）
目的：「建学の精神」の変遷について、寺川俊昭氏に聞き取り調査を行い、経緯を明らかにすること。

【本年度の経過報告と今度の課題】
「建学の精神」教育推進研究は、本年度、研究の視点①を先行して研究活動を進めてきた。そのような中で、以下の3つの内容が、研究課題として明らかとなった。

1　近代化過程における「宗教学校」・「宗教教育」の位置に関する研究

◎清沢満之の「宗教学校」という言葉の意味に関する研究
→磯前順一氏による講演（第6回研究会）　＊内容整理中
・専門学校令において文科省が、キリスト教系大学を統制する意図を持っていたのに対し、仏教系大学はその統制外にあったことなどが報告された。

◎近代化過程における「宗教教育」をめぐる問題点の整理
①専門学校令と大学令における文科省の意図についてのさらなる研究
・大学令において文科省は、宗門系大学への指導として社会福祉系、もしくは文学部系（リベラルアーツ）に位置付けるよう指導があったが、現状として宗門系は文学部が多い。
→明治期、宗教というものを解体して倫理や道徳にすり替えていこうとする意図が働き、宗門系は社会福祉やリベラルアーツ（寺子屋）的な任にあたらせようとしたのか？宗門系は自らを思想・哲学分野に位置付けようとし、文学部にとどまったのか？宗門系大学の動向を確認する必要がある。
⇒2012年度：公開研究会開催予定

②文部省の宗教・宗教教育、政策的な研究：宗教と教育の関係
⇒2012年度：公開研究会開催予定

③明治における仏教史・教育史
⇒2012年度：公開研究会開催予定

2　本学における「建学の精神」の位置に関する研究

◎清沢満之の「開校の辞」と佐々木月樵の「樹立の精神」が、「建学の精神」として位置づけられることとなった経緯の確認。

・寺川俊昭氏への聞き取り調査（2011年11月実施）

→松原祐善学長が、清沢満之の「開校の辞」を源流とする大学運営へと鮮明化させた。佐々木の「樹立の精神」は文化的な香りが強いが、「精神」という面で印象が弱いという議論が当時なされた。結果、両者の言葉を「建学の精神」として堅持することとなった。

清沢によって「真宗」は、行政面においても教学面においても、近代的な形での大転換を遂げた。そのことの大学における確認が鮮明化した。

◎清沢満之の「開校の辞」の持った意味と、その現代的表現化。

◎佐々木月樵の「樹立の精神」の持った意味と、その現代的表現化。

3　現代における仏教系大学の現状と課題に関する研究

◎仏教系大学における「建学の精神」自己表現の調査

→「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究―「心の教育」の所在を探る―」の科研報告を手掛かりに研究開始

◎本学の現状

・学則、宗教行事など本学の宗教的雰囲気の問題点の整理。

・教職員、学生の「建学の精神」の受入状況（『知進守退　大谷大学白書―その実態』1997年時点からの課題）。

・「建学の精神」の具現化あるいは現代的表現化とは、脱宗教化・脱仏教化であるのか。宗教色の強調であるのか。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者・教授　ロバート F. ローズ
（仏教学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班、中国班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈英米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

(1) *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版について

長年取り組んできた真宗近代教学論文集の英訳出版が今年度ようやく実現し、11月にSUNY出版から発刊された。（書誌情報：Mark L. Blum and Robert F. Rhodes, eds, *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*, State University of New York Press, 2011. 390 pages. ISBN 978-1-4384-3981-5）。年末に関係研究機関・図書館・研究者への献呈本の発送を終え、今後、出版を記念した真宗近代教学に関するシンポジウムを2013年度に開催すべく計画を進めていく。

(2) 佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究について

一昨年度から継続してきた佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」英訳については、以下の日程で翻訳研究会を行い、一通り全体の翻訳を終えた。今後、全体の訳語や文章の一貫性を確認し、必要な部分に注を付し、序文を付けて来年度の紀要に出版できる形にまとめる予定である。

第１回研究会　11月29日(火)　18：00～19：30
第２回研究会　12月20日(火)　18：00～19：30
第３回研究会　２月３日(金)　14：30～16：00

Ⅱ．国際学会関係

(1)国際真宗学会（IASBS）学術大会

８月４日㈭から６日㈯の３日間、大谷大学を会場に第15回国際真宗学会学術大会が真宗関係５大学共同開催の形で開催された。学内実行委員会が立ち上がるまで国際研英米班が窓口となって準備を進め、実行委員会と共に大会運営にも協力した。10カ国以上から総数130名あまりの参加者があり、充実した大会となった。英米班研究発表の面では、大谷大学パネルに加えて嘱託研究員・研究補助員による個人発表２本が行なわれた。

・学術大会の概要

開催期日：2011年８月５日㈮・６日㈯
（４日の夕方には龍谷大学アジア仏教センターとの共催による「浄土教に関する特別国際シンポジウム」）

会場：大谷大学　響流館３階メディア・ホール、マルチ・メディア演習室

テーマ：True Disciple of the Buddha　真仏弟子

サブテーマ：The Mission and Challenges in Contemporary Society 現代社会における課題と使命

二日間で７つのパネル発表と31の個人発表があった。

大谷大学パネル：Shin Responses to Modernity

Presenters:

1）INOUE Takami, "Ishikawa Shuntai's Envisioning of Shin Buddhism in Modern Japan"

2）Mark L. BLUM (State University of New York), "De-mythologization in Modern Shin Buddhism"

3）James C. DOBBINS (Oberlin College), "D.T. Suzuki and the Modernization of Shin Buddhism"

4）Michael PYE (University of Marburg), "Trends in the Early Clobalization of Shin Buddhism"

嘱託研究員、研究補助員による個人発表

1）Michael Conway, "The Right Track for Preaching and Listening to the Dharma: A Consideration of Shinran's Quotation of the *Anleji* in His Comment on the 'True Disciple of the Buddha'"

2）Shusuke Yamataka, "True Disciple of Buddha: The Life of Realizing Nirvana"

(2)ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議

８月24日から27日までエストニアのタリン大学で開催された第13回ヨーロッパ日本研究協会国際会議の宗教・思想史部会で、以下のような90分のパネル発表を行なった。概要は以下の通り（詳細は所報59号記事を参照）。

Otani University

Panel Title: Spiritual Healing in Japanese Pure Land Buddhism: Cures for Suffering in Genshin's and Shinran's Thought

Presenters: 1）Robert RHODES, professor (Buddhist Studies) "Terminal Care Practice in Heian Pure Land Buddhism: the Case of the Nijūgo zammaie"

2）Michael CONWAY, lecturer (Shin Buddhist Studies) "Medicinal Metaphors in a Soteriology of Transformation: Shinran's View of the Power of the *Nenbutsu*"

3）INOUE Takami, associate professor (Shin Buddhist Studies) "A True 'Healing' in Amida's Compassionate Light: The Cure for Incurable Diseases in the *Nirvana Sutra* and the *Zenkōji Engi*"

(3)アメリカ宗教学会（AAR）年次大会

11月19日㈯から22日㈫まで、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市において、アメリカ宗教学会（American Academy of Religion）の年次大会が開催され、研究員１名（井上尚実准教授）と嘱託研究員１名（マイケル・コンウェイ講師）が参加した。学会の会期中には、アメリカで活躍している仏教研究者と積極的に面談を行い、研究情報を収集した。2012年度のシカゴ大会に向けて、学会の動向を把握することができ有意義であった。AARは、海外の仏教研究者が最も多く集まる学術大会の一つであり、今後も研究発表を含めて英米班から研究員の派遣を続ける必要がある。

Ⅲ．公開講演会の開催

今年度は以下のような３回の公開講演会を開催した。

(1) 2011年６月２日㈭　16：10～18：00

於：マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）

講師：Kósa Gábor コーシャ・ガボール博士
（ハンガリー、エトウェシ・ロラーンド大学准教授）

題目：Some Buddhist Iconographical Features of the Chinese Manichaean Paintings Recently Identified in Japan
「近年日本で確認されたマニ教絵画にみられる仏教図像学的特徴」

(2) 2011年７月８日㈮　16：20〜17：50
於：マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）
講師：Micah L. Auerback マイカ・アワーバック博士（ミシガン大学准教授／日本学術振興会研究員）
題目：History as Apologetics: New Accounts of the Buddha Śākyamuni in Meiji Japan
「護法論としての仏教史：明治時代における釈迦牟尼仏の語り直し」

(3) 2011年11月15日㈫　16：20〜17：50
於：マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）
講師：Jessica L. Main ジェシカ・L・メイン氏（カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学）
題目："Shin Buddhism for the Good of Society: To Act within or beyond the Religious Organization (*kyōdan*)."
「社会のための浄土真宗―教団を通して実践するか否か―」

今年度３回の講演会は、比較的若い研究者による意欲的な内容の研究発表であり、活発な質疑が交わされた。他にも講師依頼を検討していた研究者があったが、来日の日程の都合などにより、予定した４回目の開催はかなわなかった。

Ⅳ．その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、図書館と連携した作業を継続する。研究活動・公開講演会などの広報や研究成果の公表については、研究所報・HP・サイボウズ掲示板などのメディアの積極的な活用をはかり、紀要や学術雑誌に積極的に論文を寄稿する努力を続ける。

〈ドイツ・フランス班〉

１．研究発表

2011年５月12日から14日に、ドイツ・マールブルクにて「第７回国際ルードルフ・オットー・シンポジオン」が開催され、村山保史氏（本学准教授・海外特別派遣者）が参加し研究発表を行った。

このシンポジウムは、国際仏教研究が中心となって交流してきたマールブルク大学神学部が主催するものであり、ドイツ国内外から広く神学者・宗教学者などが集って３年ごとに行われている。

今回のテーマは"Geschlechtergerechtigkeit : Herausforderung der Religionen"（性の公正：諸宗教の挑戦）であり、諸宗教における性に関する公正性（正義）がどう認識され、確保されているかについて議論がなされた。

そのようなシンポジウムにおいて、村山氏は"Transdendenzvorstellungen"（超越のイメージ）というサブテーマがついたブロックに属し、"Genderimplikationen in Symbolisierungen des Göttlichen in buddhistischen Traditionen in Ostasien"（東アジアの仏教的伝統における神的なものの象徴化に示唆されるジェンダー）というタイトルで講演を行った。

２．シンポジウムの論文化（刊行準備）

2010年にフランス国立高等研究院においておこなわれたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」で口頭発表した原稿を加筆修正し、論文化（英語・フランス語）したものを同研究院のフィリップ・ポルティエ教授に送り、フランスでの刊行の準備をすすめた。

ロバート・F・ローズ
"The Buddhist-State Relationship in Japan: Some Observations on the Thought of Saichō and Kūkai, Two Early Medieval Monks of the Ninth Century（日本における仏教と国家―最澄と空海の思想についての一考察）

村山保史
"State and Religion in the Thought of D. T. Suzuki"（鈴木大拙の思想における国家と宗教）

藤枝　真
"Keeping Up the Grand Narrative: National Identity and State Shintoism in the Public Sphere"（「大きな物語」を保ち続けること：公共領域におけるナショナル・アイデンティティと国家神道）

番場　寛
"Essai sur le discours religieux dans le Japon contemporain - Autour des différents noms de Shinran et du Namuamidabutsu"（宗教の〈ディスクール〉への試論―親鸞と南無阿弥陀仏の異名をめぐって）

〈東アジア班〉

中国社会科学院歴史研究所とは2010年に学術交流協定を締結し、交流に努めてきた。本年度は２年目に当たり、本学から２名が先方を訪問、先方から４名を本学へ招聘し、交流を深めた。また、今後の交流に関する協議も行った。

1．2011年10月13日(木)～17日(月)、浅見直一郎教授、福島重任期制助教が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。
○3～8世紀における日中の葬制比較　　浅見直一郎
○宋元時代の河南仏教―嵩山少林寺を中心にして―
福島重

また、北京市及び周辺の仏教寺院における調査を行った。

2．2011年12月4日(日)～12月10日(土)、楼勁研究員、張彤『中国史研究』編集部主任、劉暁研究員、張国旺副研究員を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。
12月8日(木)　午後2時40分～5時　マルチメディア演習室（響流館3F）
○近年新たに刊行された河北の元代仏教碑刻とそれに関する問題
張国旺（中国社会科学院歴史研究所 隋唐宋遼金元史研究室副研究員）
○元代『大開元一宗』補論
劉　暁（中国社会科学院歴史研究所 隋唐宋遼金元史研究室研究員）
○中国大陸の史学雑誌の発展状況
張　彤（中国社会科学院歴史研究所『中国史研究』編集部主任）
○近年の中国古代史新資料の発見とそれに関する問題
楼　勁（中国社会科学院歴史研究所研究員、歴史研究所所長助理、科研処処長）

なお、今回来日された楼勁先生は中国社会科学院の国際交流事務責任者でもあられたため、協定に基づく今後の交流についての協議をおこない、今後の交流実施について、双方が組織的にすすめられるように認識を一致させた。具体的には、毎年の研究者の相互訪問や出版物の交換などが決められた。さらに研究者の交流を進めつつ、3年後ぐらいをめどに共同学会を開催することを目標に取り組んでいくことで合意した。また、先方からは若手研究者の育成のため、院生などが留学することに関しても受け入れ準備があるとの申し入れがあった。

西蔵文献研究

チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授　兵藤 一夫
（仏教学）

研究目的

本研究班の目的は、北京版チベット大蔵経をはじめとする本学所蔵のチベット語文献、ならびにタイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本を、国内外の研究者からの要請が多い文献を中心に電子テキスト化やデジタル画像化を施し、国内外の研究を支えるために公開することである。

研究計画

1．貴重なチベット語文献の電子テクスト化

本学所蔵の稀覯書ツァンナクパ著『量決択註』（*Tshad ma rnam par nges pa'i Ti ka legs bshad bsdus pa*）の電子テクスト化を進め、科文とダルマキールティの『量決択』（*Pramāṇavinścaya*）の対応箇所を入力した校訂テキストを作成し、公開する。ネット上での公開に加え、さらに冊子体での出版を検討する。

また本学所蔵の木版本を底本として既に入力済みのミラレパの『グルブム（十万歌）』の電子テクストに、テンギェーリン版および青海民族出版社本の異同を調査して校訂したテキストを作成して公開する。

2．大谷大学図書館所蔵チベット語文献データベース

大谷大学図書館所蔵データの提供を受け、それを基に研究者向けのデータベースを作成する。さらにTBRC（Tibetan Buddhist Resource Center）のチベット語文献PDFコア・コレクションの学内での利用促進のためにデータベースを作成する。

3．パーリ語貝葉写本のデジタル化

今までに稀覯文献と判明しているものを中心にデジタル画像データ化の作業を進めている。それと同時に、現地調査も実施しながら、タイ王室から寄贈されたものを中心とする東南アジアのパーリ語貝葉写本（〈大谷貝葉〉と略称）における稀覯文献の抽出作業をおこなっている。

これら一連の作業の中で、大谷貝葉のうち稀覯文献と考えられるテクストと同一内容と思われる数点の写本が海外の研究機関に保存されていることが確認された。よって2011年度は、フランス極東学院（EFEO）名誉講師ジャクリーン・フィリオザ女史の協力のもと、EFEOにおいて写本の同定作業を進める。

4．海外の研究者、研究機関との交流

海外の研究者、研究機関との交流を行ない、適宜に研究会などを行なう。

研究成果

西蔵文献研究班は、以上の研究計画に基づき2011年度の研究を行なった。それぞれの研究成果は以下の通りである。

1．貴重なチベット語文献の電子テクスト化

本学所蔵の稀覯文献、ツァンナクパ著『量決択註』（*Tshad ma rnam par nges pa'i Ti ka legs bshad bsdus pa,* 大谷蔵外 No. 13971）の電子テクスト化について、校訂・編集作業を進めた。

当初、1989年に臨川書店より複製物『善釈要集: 知識論決択広註』大谷大学編として出版されたものを底本としていたが、不鮮明な箇所が多く、より精密な校訂作業が行えるよう当該文献の撮影を2011年６月17日㈮から18日㈯にかけて行った。

校訂テキストの入力作業は全三章終了した。科文の作成は第二章まで終了し、第一章までテキスト中に科文を加えた。『量決択』の対応箇所を確認し、入力している最中である。年度内に第一章の校訂テキスト（科文および『量決択』の対応箇所を含む）および、第二章の校訂テキスト（科文を含み『量決択』の対応箇所は未記入）を公開する予定である。

ミラレパの『グルブム（十万歌）』については、西蔵文献研究班ホームページ（http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/project/otet/texts/mila_gurbum/index.html）で公開している。

2．大谷大学図書館所蔵チベット語文献データベース

北京版チベット大蔵経とTBRC（Tibetan Buddhist Resource Center）より購入したチベット語文献PDFコア・コレクションを、学内で利用できるようにした。利用手順は、まずTBRCのホームページ（http://www.tbrc.org/）より閲覧を希望する文献の番号を検索し、その番号をもとに、大蔵経であれは、http://www-i.otani.ac.jp/tbrc/tripitaka.htmlから、その他のチベット人の著作（蔵外）に関しては、http://www-i.otani.ac.jp/tbrc/tbrc.htmlから直接PDFにアクセスできるようにした。なおいずれも学内関係者にのみ利用を限っている。

昨年度の科研（研究成果公開促進）により撮影した本学所蔵北京版チベット大蔵経のPDF（中観部・唯識部）については、今年度（５月以降）http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/tibdate/search.htmlから閲覧できるようにした。このホームページは学外からのアクセスが可能である。また、今年度は科研としては採択されなかったが、学内者による撮影技術の習得と維持のために２月末より約１ヶ月間、北京版の撮影作業を実施している。

大谷大学所蔵蔵外文献については、オンラインデータベースを完成した。公開については、学内サーバーの準備が整い次第、実施する予定である（来年度初め）。

3．パーリ語貝葉写本のデジタル化

本学所蔵の数ある稀覯写本の中で、*Mahābuddhaguṇanvāta aṭṭhakathā*（請求記号番号：XXXIX -5, 6）という文献が、現時点では大谷貝葉以外には現存していない可能性を、フランス極東学院名誉講師ジャクリーン・フィリオザ女史によって指摘されていた。2011年８月４日より16日にかけて、本研究班嘱託研究員：清水洋平氏によるパリ・フランス極東学院での調査の結果、同一のタイトルが記された文献は存在しないこと、タイトルは同一ではないが内容が一致するという文献（クメール文字写本ではタイトルの一部が省略される場合が時折見られる）も見あたらないことが確認された。よって、大谷大学が所蔵する同文献については、現時点では、他にその存在が確認されていないことから、貴重な写本文献資料であることが確認された（詳細は「研究所報」No. 59を参照）。

本学所蔵のその他の貝葉写本についても、国内外の研究者からの問い合わせがあり、今後の対応を検討している。

4．海外の研究者、研究機関との交流

2011年10月６日㈭：中国蔵学研究中心の鄭堆副総幹事長を初め、七名の研究員が本学に来校し、研究所を視察し、図書館において本学所蔵のチベット語文献を閲覧した。その際、本研究班として情報交換を行い、今後、交流を続けていくことを確認した。また、来年（2012年）夏、北京で中国蔵学研究中心主催の学会が開催されるが、本研究班からも参加することになった。

2011年11月17日㈭：中国故宮博物館より研究員が本学に来校し、研究所を視察し、図書館において本学所蔵

のチベット語文献を閲覧した。その際、本研究班としての活動を紹介するなどして、今後も相互に交流することを確認した。

真宗同朋会運動研究

真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする

研究代表者・教授　水島 見一
（真宗学）

本研究は、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていきたい。

以上のことから、本研究は昨年度に引き続き、全体を理論編と調査編の二部構成として組み立てた。具体的な研究は以下のとおりである。

①理論編の成果：

基礎資料の作成：

研究の基礎資料づくりとして、真宗大谷派宗門内で、同朋会運動に尽力され、リードした先達の思想などの整理をしていく。具体的には以下の人物に焦点をあてて、思想やその背景の把握につとめた。

・曽我量深
・暁烏　敏
・高光大船
・高光一也
・訓覇信雄
・松原祐善
・藤原鉄乗
・坂木恵定
・米沢英雄
他

②調査編の成果：別紙参照

公開研究会　：

同朋会運動の社会的意義を明確化していくために、宗門内・外両面からの意見・研究報告を公開研究会（計13回）という形で、研究展開した。

また宗門の研究機関である教学研究所や全国推進委員協議会との連携、また学外研究機関（東京大学など）とも交流し、具体的に研究活動を展開した。その具体的成果の一つが「お念仏手渡し奉仕団」の企画と展開である。この活動は、御門徒の方々の大谷大学への信頼を回復し、深めたという実績を挙げている。同時に学生達の学びにも具体性を開くことに寄与した活動である。

聞き書き調査の実施：

本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開した。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査時間に膨大な時間を要する。この研究期間をとおして、全国各地で約30件の調査を行っている。詳細な調査結果については、ここでは省略させていただく。

③成果の出版：別紙参照

現在、本研究班の成果を出版に向けて活動している。

内容の構成については、別紙のような構成をもとに作業を進めているが、今後の研究成果の検討や出版社（法蔵館）との協議などから変更する場合がある。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授　釆睪　晃
（仏教学）

本学は多くの貴重な資料を所蔵しているが、それらの多くはじかに現物に接しない限りは利用できない状況になっている。この状況は、利用促進の側面からは言うまでも無く、資料保存の側面からも決して望ましいものではない。既に本研究所のいくつかの研究班が

独自に貴重資料のデジタルアーカイブ構築及び公開を試みてはいる。しかしながら、専門的な観点からは個別の研究班による対応が望ましいものの、より包括的な視点からも並行的に行われなくてはならない。本資料室の使命は個別研究班がフォローしきれない領域をカバーすることにある。そのため、どのような領域のプロジェクトを推進していくべきかの検討を継続的に行っている。

また、多くの学内学会を有する大谷大学では、様々な学術刊行物が発行されているが、それらの利用もいまだ決して十分とは言えない。これら学内から出版された学術刊行物のリポジトリの整備を進めてきたが、その基本的なシステムを概ね開発することが出来た。今後は、収容するコンテンツの整備とともに、詳細な仕様の確定を進めていく。

さらに、2011年度に引き続き、本学図書館所蔵の古典籍資料の書誌データベース整備とデジタルアーカイブ化の蓄積、古典籍資料の公開に向けて、継続的に2,724件のデータ蓄積を行った。現状は、研究の情報化に対応した研究基盤の整備、及び古典籍資料を効率的に検索できるよう検討を重ねている。

2012(平成24)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（大内班）	研究課題	道宣著作の研究
	研究代表者	大内文雄（教授・東洋史学）
	研究員	松浦典弘（准教授・東洋史学）
	協同研究員	藤井政彦（前本学非常勤講師）
		戸次顕彰（本学非常勤講師）
		今西智久（任期制助教）
	研究協力員	(RA)松岡智美（博士後期課程第３学年）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（松川班）	研究課題	新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築
	研究代表者	松川節（教授・東洋史学・人文情報学）
	研究員	三宅伸一郎（准教授・チベット学）
	研究協力員	(支援)清水奈都紀（奈良大学非常勤講師）

※大内班は2012（平成24）年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）の採択による。松川班は2012（平成24）年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）採択により個人研究から共同研究へ組織変更。委嘱期間：2012年４月１日～2013年３月31日（但し、科研費研究期間：2012年４月１日～2015年３月31日）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2010～2012年度科研費採択】 一般研究（赤枝班）	研究課題	戦後社会におけるジェンダー・セクシュアリティ秩序の形成と新たな親密性の構築
	研究代表者	赤枝香奈子（任期制講師・社会学）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（脇中班）	研究課題	触法知的障害者の更正と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価
	研究代表者	脇中洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（大草班）	研究課題	プラトン『メノン』の総合的研究
	研究代表者	大草輝政（任期制助教・特別研究員）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（清水班）	研究課題	タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究
	研究代表者	清水洋平（本学、名古屋大学非常勤講師・特別研究員）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（竹花班）	研究課題	後期田辺哲学における象徴概念の研究
	研究代表者	竹花洋佑（本学非常勤講師・特別研究員）
【2012～2014年度科研費採択】 一般研究（河﨑班）	研究課題	バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究
	研究代表者	河﨑豊（任期制助教・特別研究員）

※赤枝班は前任校時に「科研費」採択に伴い所属が変更になったもの。脇中班は2012（平成24）年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）の採択による。大草班・河﨑班・清水班・竹花班は2012（平成24）年度日本学術振興会科学研究費助成事業若手研究（B）の採択による。委嘱期間：2012年４月１日～2013年３月31日（但し、科研費研究期間は赤枝班が2010年４月１日～2013年３月31日、大草班・清水班・竹花班・河﨑班が2012年４月１日～2015年３月31日）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2012～2013年度科研費採択】 一般研究（黒澤班）	研究課題	保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究
	研究代表者	黒澤祐介（任期制助教・特別研究員）
【2012～2013年度科研費採択】 一般研究（宋班）	研究課題	「民族学校」の日韓比較研究――日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」を中心に
	研究代表者	宋基燦（任期制助教・特別研究員）

※2012（平成24）年度日本学術振興会科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）の採択により、2012年８月31日付発令。委嘱期間：2012年８月31日～2013年３月31日（但し、科研費研究期間：2012年８月31日～2014年３月31日）

2011(平成23)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

元朝～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究

研究代表者・准教授　渡部　洋
（中国語・近世中国語文法）

本研究の目的はモンゴル語と漢文のバイリンガル史料を始めとする多言語史料を文献学的に研究し、元朝から明朝初期に於ける多言語接触下の言語状況を明らかにするための基礎資料を作成することにある。幸いにも本研究は平成21年に大谷大学真宗総合研究所より一般研究費を得ることができ、更に平成22年度より日本学術振興会から科学研究費補助金（科研費）を受けている。このような好条件のもと、我々は数年に渡って合璧碑文や甲種本『華夷訳語』等の文献について研究を行っている。

昨年度は主に下記の研究活動を行った。本研究班のメンバーである毛利英介氏が甲種本『華夷訳語』の「捏怯來書」のモンゴル語の転写と蒙漢の試訳を作成した。そして、研究班全員で既に解読済みの甲種本『華夷訳語』中の「誥文」、「勅礼部行移応昌衛」、「敕礼部行移安荅納哈出」、「勅僧亦鄰真藏卜」と『元朝秘史』、『孝経』、読解済みの碑文等を参考にしてそのローマ字転写と試訳を検討した。この際、本研究班に参加している漢語、モンゴル語、トルコ語、チベット語等の言語と元王朝時期の歴史に精通した各研究者により様々な面から考察を加え解読を行った。また、この「捏怯來書」の解読後、モンゴル帝国時代の歴史的背景やその時代が後にどのような影響を周辺地域に残したのかを知る必要があったので、その専門家である片桐宏道氏にお頼みし《17・18世紀チベットにおけるモンゴル時代の影響》というテーマで報告していただいた。この報告は本研究班にとって時代認識を新たにするよい機会となった。

次に研究班メンバーの石野一晴氏が甲種本『華夷訳語』中の「囊加思千戸狀」の転写と試訳を行い、研究班全員で「捏怯來書」の時と同様の方法で言語面と歴史面での検討を行った。また、甲種本『華夷訳語』の勅書と書状をすべて解読した後、研究班メンバーの伴真一朗氏に《甲種本『華夷訳語』についての総まとめ》というテーマで報告していただいた。その際、二つの問題を提起された。一つは漢文の総訳に関してである。勅書にあるモンゴル語文に対しての漢語の総訳はできるだけ正規の漢文に仕立てようとしているが、中には白話の語彙も混在していた。また、書状には総訳が見られなかった。もう一つは内容に関してであるが、瓦解していくモンゴル族のなさけなさを強調し、明王朝が圧倒的な強者であり支配者であることを感じさせるものであった。これらの二つの問題が意味しているものは何か研究班で検討してみたが、今だ納得のできる答えは出ず今後の課題となった。

甲種本『華夷訳語』の解読後、これまで解読した合璧文が他の時代のものと比較する必要があるという考えから、清朝時代の合璧文を解読することになり、『喇嘛説』（18世紀　乾隆時代の碑文）の解読を行った。この解読にはレッシングの英語訳を参考にしたが、それだけでは不十分であることから清朝時代の碑文に詳しい承志氏（総合地球環境学研究所研究員）にも参加していただいて貴重なアドバイスや参考資料を提供していただいた。特に『乾隆朝上諭档』（大17冊中国第一歴史档案館編）、『乾隆朝起居注』40（廣西師範大學出版社）、『衛藏通志』（ラマ説版本）等は大いに役立つこととなった。以上の貴重な参考資料のおかげで順調に解読を終えることができ、次の史料「増修舎利佛塔記」（崇徳６年）の解読作業に着手し現在継続中である。

また、こうした史料の解読を行う一方でこれまで解読してきた碑文の研究成果の整理も行っている。ただ、言語面においてはかなり詳細な考察が必要なので大変多くの時間を費やしているが、ほぼ予定通りに計画は進んでいる。整理し形となったものが今年３月紀要に掲載した『「達魯花赤竹君之碑」（1338年）訳注稿』（大谷大学真宗総合研究所研究紀要　第29号）である。本研究に参加していただいている松川節氏、小野浩氏、古松崇志氏、毛利英介氏、石野一晴氏、伴真一郎氏、清水奈都紀氏等には有り難くもこの訳注稿完成に多くの時間と力を注いでいただいた。そのおかげでこの訳注稿作成作業を通して既に解読した碑文の整理方法に一つの方向性を見出すことができ、今後の整理作業をよりよく進めることができる礎を築くことができた。今後は先の訳注稿のような形で解読済みの碑文を整理し研究雑誌に発表していくつもりである。そして発表したものをデーターベース化し元代のバイリンガル史料の研究材料にするつもりである。

甲種本『華夷訳語』に関しては、碑文とは異なる方

法で整理しようと思っているが、具体的にどのように発表し、研究材料としてどのようにするかは現在検討中である。碑文と異なり傍訳の白話、漢文に似せた総訳というものがあるので形式的に酷似している『元朝秘史』との比較対照的な研究も必要である。基礎資料としてどのような形にするのかは、元代の漢文訳、白話文、モンゴル語、歴史的背景等の面からもう少し時間をかけて総合的に検討したいと考えている。

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容—清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析—

研究代表者・教授　池上 哲司
（倫理学）

本研究の目的は、清沢満之（1863-1903）の遺稿中に発見された東京大学（および東京大学大学院）在学時の哲学関係講義録の全体を翻刻してフェノロサを中心とする東京大学の外国人哲学教授たちの講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。本研究が研究計画としてあらかじめ設定しておいた課題は、以下のとおりである。(1)講義録の編集（資料調査、外国人哲学教師資料作成を含む）、(2)講義録の思想的分析、(3)清沢満之における西洋哲学思想受容の思想的分析。

このうち(1)が2010年度の重点課題であり、2011年度は(2)(3)を重点課題として(1)を平行しておこなう予定であったが、『真宗総合研究所研究紀要』における2010年度の研究成果掲載が次年度の2011年となることから、まず、(1)にかんする研究成果として、2010年度の課題であった、東京大学における外国人哲学教師資料の公開を2011年度におこなった（西尾浩二「明治前期の東京大学外国人哲学教師の資料調査—日本における西洋哲学の初期受容に関する調査・分析のために—」（『真宗総合研究所研究紀要』第29号、2012年3月、59～120頁）。

ついで、(1)および(2)(3)にかんする研究成果は以下のとおりである。講義録編集のための(A)資料調査を二度、実施した。2011年11月17日の東京大学におけるものと、12月12日の Chinese University of Hong Kong（香港中文大学）におけるものである。2010年度からの継続作業である(B)編集作業としては、清沢以外の筆記者によるフェノロサ講義録として、市島謙吉の「フェノロサ哲学講義」（画像資料）を文字化し、同様に、高嶺三吉筆記による「高嶺三吉遺稿」（画像資料）の哲学史部分の一部を文字化した。清沢筆記の講義録の編集作業としては、やはり哲学史部分の一部を文字化した。あわせて、それぞれの(C)講義録の思想的分析作業、(D)清沢の西洋哲学思想受容の思想的分析作業を、各研究分担者・連携研究者の立場からおこなった。(A)～(D)作業の進捗確認のため、共同の(E)研究会を毎週おこない、研究活動成果の一般公開作業としては、2012年2月22日に外部講師を迎え、大谷大学響流館3階マルチメディア演習室にて(F)公開講演会を開催した（講師：東洋大学ライフデザイン学部教授 三浦節夫氏、講題「井上円了の東京大学時代」）。HP では、研究全体の進捗状況を逐次、一般公開した。

(3)にかんするものとして、清沢を介してフェノロサ哲学の影響を受けた諸思想についての研究等の成果は、まず研究論文として以下のものを公開した。①村山保史「曽我量深の象徴世界観」（『哲學論集』第58号、2012年3月、24～41頁）。②同「金子大榮「私の真宗学」の翻刻と解説㈠解説編」（『真宗総合研究所研究紀要』第29号、2012年3月、23～58頁）③竹花洋佑「「種の論理」の生成と構造—媒介としての生—」（『思想』1053号、岩波書店、2012年1月、261～280頁）、同「身体と種—西田哲学と田辺哲学」（藤田正勝編『「善の研究」の百年—世界へ／世界から』京都大学学術出版会、2012年11月、199～217頁）。ついで講演や口頭発表等のかたちで研究成果を公開したのは以下のものである。①村山保史 "Genderimplikationen in Symbolisierungen des Göttlichen in buddhistischen Traditionen in Ostasien"（講演）、Ⅶ. Internationales Rudolf-Otto- Symposion, Philips Universiät Marburg、2011年5月、②同「曽我量深の象徴世界観」（口頭発表）、日本宗教学会第70回学術大会、関西学院大学、2011年9月（口頭発表要旨、『宗教研究』第85巻第4輯、日本宗教学会、2012年3月、410～411頁）、③同「近代真宗仏教者の犠牲観—多田鼎と暁烏敏を中心として—」（講演）H23年度高橋科研第1回研究会、東京大学、2011年9月、④竹花洋祐 "Tanabe's Theory of 'World-Scheme' and Miki's 'Logic of Imagination'"、International Conference: Japanese Philosophy as an Academic Discipline（口頭発表）、2011年12月。

共同研究

世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究 —過去の復元から未来への保存へ—

研究代表者・教授　松川　節
（東洋史学・人文情報学）

モンゴル国に現存する世界文化遺産エルデニゾー僧院の保存・保護に向けて、「過去の復元」（考古学・歴史学）、「現在の利用」（建築学・文化人類学）、「未来への保存」（文化財保存科学・仏教美術史）という３つの観点から、基礎研究と現地における本調査を行った。基礎研究及び現地調査（2011年４月28日～５月８日、９月11日～９月23日、2012年１月３日～１月８日、１月21日～29日、２月16日～２月21日、３月17日～３月21日）の成果は５月14日及び３月10日に大谷大学にて開催された研究集会にて報告され、また、９月17・18日にモンゴル国ハラホリン郡で開催された国際シンポジウムにおいて報告された。

2011年度の現地本調査は、1)ゴルバンゾー内のガンザイ壁画の年代比定　2)ゴルバンゾー寺の計測と、その起源をめぐる建築史的研究　3)エルデニゾー博物館収蔵遺物のデジタル・アーカイブ化の研究、以上の項目について行われた結果、 1)についてはC14分析により、19世紀中葉成立との結果を得、2)14世紀に大都（現在の北京）に建立された寺院との類似性を有すること、3)エルデニゾー博物館に所蔵されるチベット語文献は、現地だけでなく、モンゴル各地から将来されたものであること、以上の成果を得た。また、９月17・18日の二日間、日本の無償援助によってハラホリンに建造され、2011年６月に開館したばかりの「カラコルム博物館」会議室で国際学術会議「エルデニゾー——過去・現在・未来——」が、国際交流基金知的交流会議助成を得て開催され、２本の基調講演と15本の報告が行なわれ、最後に、モンゴル国政府に向けて、エルデニゾー寺院の研究と保存保護に関する６項目からなる「提言書」が全会一致で採択された。英文による会議の報告論文集（*The International Conference on "Erdene Zuu: Past, Present and Future,"* September 2011, Ulaanbaatar, 200pp.）が国際会議日程に合わせて刊行され、さらに、そのモンゴル語版が学術雑誌 *Орхоны хөндийн өв*（『オルホン渓谷遺産』）の創刊号に収録され、2012年３月に刊行された。また、モンゴル語で出版されている基礎的研究書であるハタンバータル・ナイガル（共著）『エルデニゾー史』の日本語訳を刊行した。一方、エルデニゾーの成立史に関わる18世紀の未発表文書２件については、モンゴル国立中央図書館から出版許可を得ることができず、刊行できなかった。

本研究課題は、ユネスコの世界文化遺産に登録されている当該地域において、遺跡の保存保護に関する実効的提案を含んだ地域密着型の現地調査を展開し、現地で国際会議を開催し、その成果を英語だけでなくモンゴル語でも刊行することにより研究成果の地域還元をはかることができたため、その学術的貢献及び地域貢献の点でモンゴル側より高く評価され、その継続を強く要請されている。今後、第２段階として、新たに判明した当該地域の８世紀～現在までの重層的文化層のうち、新出土遺物が豊富であり、かつ代表者が専門とする13～17世紀の文化層に焦点を絞り、新発現仏教遺物と文献記述との整合性の探求という歴史学的研究基軸を打ち立て、今までの研究を中断なく継続・発展させることにより、新たな北アジア仏教史、ひいては13～17世紀の北アジア史の再構築を目指す。

共同研究

皎然の禅体験と詩作

研究代表者・教授　乾　源俊
（中国文学）

皎然の詩には釋家としての自己と詩人としての自己の矛盾にいかに折り合いをつけるかという問題設定が基底にあるように見受けられる。釋家としてのおのれは跡形もなく消え去ることをもとより望んでいる。それに対して詩作行為は名を記しこの世に姿を顕してしまうことに他ならない。彼にとってこの問題は切実で、実際に文筆行為をしばらく廃したことがあったと述べてもいる。結局のところ彼は詩作の魅力から逃れることはできなかったようだが、重要なことは、こうした厳しい問いかけが、彼の詩を他の詩人の詠む風景とは

違った、独特のものにしているように思われる、ということだ。彼はしばしば、好んでというべきか、詩に禅中の境涯を語ろうとする。多くの場合、夜中月下になされる坐禅で、青い光によって「定」の境地が比喩される。こうした映像をとおして、本来伝え得ぬものであるはずの体験が伝えられようとする。こうした代替物が必ずしもわれわれに体験として還元されるわけではない。しかしその一方で、不意にある清浄な風景がわれわれの目の前に広がることがある。風景をとおして詩人の心境がわれわれのなかに入ってくるように感じることがある。彼にとって自己の得た感触を伝える媒体として詩は欠くことのできぬものなのだろう。それがどこまで禅によるものか、あるいは詩作行為に本来そなわるものか、ただちに言うのはむずかしいけれども。こうした瞬間は、ふと訪れるもので、次に読んだときおなじ感覚がよみがえってくることはない。われわれは皎然の詩をひたすら読んで、原文に忠実な訳を施し、そのこころを注釈に敷衍することに努めた。われわれの読みがその場で消え去るとしても、痕跡をとどめることができるように。作業は、分担して作成した原稿を集中的に議論し、その成果を第二稿に反映し、更に共同研究者の再度の議論を経て定稿とした。その結果、皎然文集十巻のうち詩は七巻、その最も重要な巻一の詩六十五首、及び于頔による序と詩に、訳注が施されることになった。これまで皎然詩の注釈は、日本のみならず中国にも存在しない。学会に裨益することであろう。

皎然の文集は、唐の貞元八年（七九二）集賢殿御書院に皎然文集を収蔵すべしとの敕により、当時の湖州刺史于頔が詩五百四十六首を全十巻にまとめ序文を書いたのに由来する。この系統の本が、明代に二種伝わる。ひとつはその詔勅を冒頭に附した『晝上人集』十巻であり、『四部叢刊』に収録されている。もうひとつは柳僉が『唐僧弘秀集』等により補った本をもとにした、毛晋汲古閣の版になる『杼山集』十巻である。これは『全唐詩稿本』の底本となり、『全唐詩』へと受け継がれている。われわれはこの汲古閣本『杼山集』をもとに、四部叢刊本『晝上人集』を対校し、『全唐詩』『唐僧弘秀集（宋本・明本）』『文苑英華』『唐文粋』『唐詩紀事』『極玄集』『才調集』『又玄集』によって校勘を加えた。『唐音統籤』『全唐詩稿本』は参照するにとどめた。汲古閣本『杼山集』を底本にしたのは、それが最も精善な本であるという理由からではなく、これ以前のテキストを考えることができ、これをもとに『全唐詩稿本』『全唐詩』が行った作業を検証することが可能であるからだ。結果として『全唐詩』とは異なった判断をしている部分がいくつかある。

注釈作成にあたり大きな助けになったのは、賈晋華『皎然年譜』である。テキストの系譜と所収作品、皎然の家系と経歴、交遊のあった人物の履歴、及びおおかたの詩の制作時期について、周到緻密な考証がここには既になされており、この成果をできる限り遺漏なく、かつ要約して掬い取ることがわれわれに課された課題となった。当然のことながら、最近の研究成果によって、糺すべきところ、疑問に思うところも指摘した。ただし、それは多くない。賈氏の作業がそれだけ完成されているということだ。

われわれが付け加え得たと思うことのひとつに、皎然の思想遍歴上の問題がある。彼は天台禅にもとづいているが、湛然との接触があるかに見える。それは詩の詳細な検討をとおしてはじめて明らかになってきた。とすればその詩世界が湛然の説く仏性説と必ずや関係するであろう。また、彼が近いのは北宗禅であるが、他にも牛頭宗との関係が指摘される。これらとの思想内容の面でのつながりは、大きな問題としてわれわれのまえにある。

共同研究

道宣著作の研究

研究代表者・教授　大内 文雄
（東洋史／中国史・中国仏教史）

唐・道宣（596−667）は、唐初期の仏教が持つ様々な難題に、同時代人として取り組み、後世の戒律学、仏教史学へ甚だ大きい影響を及ぼしている。本研究は、道宣が遺した多種多様な著作群の全体像を把握し、道宣の思想と行動の跡を総合的に解明することを目的とするが、そのための方法として、それらに付されている前序・後序等の序文の読解作業を行なってきている。本研究は、藤善真澄氏『道宣伝の研究』の成果を基礎として、道宣の著作そのものの総合的理解を図り、道宣その人の思想と、彼を取り巻く時代と社会、及び仏教の実態把握を企図して大谷大学内に発足した前年度の研究に連続するものである。以下、科学研究費補助金（科研費）・真宗総合研究所一般研究・研究課題名「道宣著作の研究」の初年度である2012年度までに実施し、成

稿を得た研究成果について、その概略を述べる。これらは、隋・唐代初期を代表する律学、歴史学、目録学また思想史に関わる、道宣自身によって述べられた序文等の現代語訳化の第一歩となる研究成果である。共同研究の成果の形式は、いづれも原漢文の釈文・訓読文・現代語訳文・語釈の順に作成されている。

道宣の著作は広範囲にわたるが、およそ以下の四種に分類される。

第１群：戒律に関わる著作群

主著の『四分律刪繁補闕行事鈔』12巻を始めとして『四分律比丘含注戒本』３巻等の、序を有する11部が数えられる。これらは数多い道宣著作の中でも最も主要の部分をなし、その著述期間もごく初期から最晩年に至る彼のほぼ全生涯にわたる。

これに関しては、戸次顕彰（研究分担者）によって、『四分律含注戒本疏』前序、及び『四分律刪補随機羯磨疏』序が、松岡智美（研究協力者）によって『四分律比丘尼鈔』序、及び『釈門章服儀』序が担当され、それらの解読の結果が共同研究の場に附され、原稿に対する数次の検討を経て、いづれも成稿を得ている。次の第２群、第３群、第４群に属する著作についても同様の検討を重ねて成稿としている。

第２群：経典目録。

これについては『大唐内典録』10巻があるのみであるが、唐代に編纂された経典目録の嚆矢として重要な位置を占めている。仏教経典の収集保存の基準を示す「入蔵録」はその後の時代に大きな影響を与え、また彼の歴史観・仏教史観を知る史料でもある。

『大唐内典録』序については、大内文雄（研究代表者）が担当し、成稿としている。『大唐内典録』各篇の序についても、順次に解読を進める予定である。

第３群：史伝関係の著作。

中国仏教史研究の基礎史料となるものである。『続高僧伝』30巻や『釈迦氏譜』１巻、『釈迦方誌』二巻、『集神州三寶感通録』３巻、『道宣律師感通録』１巻の五部があり、また戒律関係の史伝記録として『律相感通伝』１巻がある。

第３群については、松浦典弘（研究分担者）によって、『律相感通伝』序が担当され、成稿が得られている。また『続高僧伝』の序及び篇序については、大内文雄（研究代表者）が本学大学院の授業の中で読解を進めており、『釈迦氏譜』『釈迦方誌』の序については次年度に向けて準備がなされている。

第４群：護法・三教論争に関係する著作群。

ここには『広弘明集』30巻、『集古今仏道論衡』４巻が含まれる。中国仏教史・思想史上の最も重要とされる史料集である。

この第４群については、『広弘明集』総序を便宜的に前・後半に分け、藤井政彦（研究分担者）、河邊啓法（研究協力者）によって担当され、また『広弘明集』巻五の弁惑篇序も総序と同様に前・後半に分け、藤井政彦、河邊啓法によって原稿化されている。更に『集古今仏道論衡』序が今西智久（研究協力者）によって担当され、成稿を得ている。

以上、道宣の著作序文の総数からすれば、その一部の成果ではあるが、今回公表する現代語訳化の手法が著作序文の全体に及ぼされれば、その成果は学界に裨益するところ大であると考えている。

共同研究

小学校の教育実践にみられる子どもの変容の分析と考察

研究代表者・教授　髙山 芳治
（社会科教育学）

本研究は、新学習指導要領のもとで、子どもたちに「生きる力」が育成されているかどうかを検証するために、教育実践を調査・分析することを目的として取り組んだ。この目的を達成するために、二つのタイプのフィールド研究を行った。

第一は、ユニークな授業・教育活動を行っている小学校のフィールド研究である。その対象として、福岡市立四箇田小学校の古賀一夫が行っている「ひとり学習」の実践と富山市立堀川小学校の教育実践を選んだ。両校では、児童が自主的、自発的に学習している。

第二は京都市内の協力校とのフィールド研究である。その対象として、京都市立金閣小学校、紫明小学科、第三錦林小学校を選んだ。

富山市立堀川小学校には、2011年10月13、14日の２日間と、2012年２月15日から17日までの３日間、参観した。

堀川小学校の教育活動の特徴の一つに、「くらしのたしかめ」と「帰りのくらしのたしかめ」がある。この活動は全学年の全学級で行われている。この活動は自発的に挙手した児童の中から１人を教師が指名する。指名された児童は学習や生活の中で経験したことを自分の意見を交えて話をする。その意見をお互いにに聞き

合い・確かめ合う活動である。1学年から6学年まで、毎日行われるこの活動が堀川小学校の児童を自発的、自主的な児童に成長させているといえる。このようなスタイル・手法は国語や社会はもちろんのこと、理科や算数でも行われている。例えば、「くらしの中の小数と分数」と題された単元で、子どもたちは、例えば「0.5」と「1/2」の（表記の）違いは何かということにさまざまな仮説を立ててのぞんでいた。計量カップや計量スプーンの実物、文房具等に書かれている数字表記を写真等で示すことで自らの仮説を他の子どもに示す子ども、あるいは、分数と小数の歴史を調べてきて披露する子ども、あるいはまた、自らの日常経験から考えて「ケーキの1/8個」とは言っても「ケーキの0.125個」とは言わないだろう、だから分数と小数の違いはここから考えられるのではないかという意見を発表する子ども。それぞれの仮説のどれにも他の子どもたちがまた真剣に耳を傾けている様子。そこでは、まさに算数とくらしが結合した授業が展開されていた。

2月15日から17日までの3日間、「福岡ひとり学習」の会の古賀一夫先生の担任する5年1組で、朝の会から終わりの会まで、古賀先生の授業と学級経営を参観した。

「ひとり学習」では、「勉強ニュース」を手がかりとして、各児童が各教科の単元の学習「計画」を立て、その計画に基づいて「ひとり学習」を行い、「反省（自己評価）」を行う。この学習法では、自分のための学習は自分の力で進めることが要求されている。教師は授業時間中巡回してひとり一人の児童の学習の援助・支援を行っている。各児童は自分の興味や能力に応じて学習「計画」を立てるので、各自が自分の学ぶペースで学習を進めていた。

5年1組は、古賀先生が四箇田小学校に赴任した最初のクラスなので、児童も「ひとり学習」のやり方がようやくわかってきた段階とのことであったが、感想を聞いてみると、「ひとり学習」が好きだと答える児童が多くいた。

古賀が引き続き6年も担任すれば、児童は「ひとり学習」の方法を習得し、自分で学習のめあてを設定できるようになり、学習をより広げたり、深めたりすることが可能になると推測できる。

第二の京都市内の協力校とのフィールド研究は、小学校との連携による授業研究として行った。2008年版学習指導要領の改訂によって、「生きる力」を育てるとともに、確かな学力を育成することが重視されることになった。それ故に、各教科の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力などを育むこと、その基盤となるのは言語力の育成が国語科のみならず各教科等においても強調されることになった。そのため、小学校との連携の下に授業研究を行い、具体的に検証した。本年度は、京都市立金閣小学校、紫明小学校、第三錦林小学校と連携し、社会科、道徳、音楽科、国語科に焦点を絞って共同研究を実施した。各小学校と数度の研究授業を行い検証した。

その成果を研究冊子にまとめ、1月に行われた京都市の研究発表会において、研究授業とともに授業実践について発表を行った。

本研究では、京都市立の3小学校と本学との小大連携による具体的な実践研究を行い、一定の成果が得られた。教職に関わる研究は、小学校など教育現場と大学との連携による開かれた研究、具体的かつ実践的な授業実践研究を継続的に行うことによって、意義あるものになると考えられる。

共同研究

『教行信証』の思想研究
—近代教学の成果を踏まえて—

研究代表者・教授　延塚 知道
（真宗学）

本研究は、親鸞の主著である『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）の一字一句の詳細な解読と、それによって見えてくる親鸞の仏道（浄土真宗）の思想研究が目的であり、最終的にはこれからの『教行信証』研究に資するために著書として出版することを目指している。

現代までの『教行信証』研究の歴史は、大きくいって二つの伝統がある。一つは、江戸期のいわゆる宗学としての研究で、その成果は現代では講録として残っている。もう一つは、清沢満之に始まるいわゆる近代教学の伝統である。それは曽我量深・金子大栄を初めとする諸先輩の著作として残っている。しかしその二つの伝統には、方法論に大きな違いが見られる。

江戸期の『教行信証』研究は、存覚の『六要鈔』を指南書として、会読、会通という方法で研究が進められている。会読とはもともと当時の研究の方法を表す言葉で、講者と問者に分かれて対座し、特定の論題に

ついて討究することである。それに対して会通とは「和会疎通」を意味するもので、『教行信証』の中で一見矛盾するかに見える文章や言葉を取りあげてその意味を尋ね、共通の意味を見いだすという方法論である。もともと仏説は、時代やその社会の人間に応じて説かれるので千差万別の説かれ方をしているが、その全ては迷いの人生を超えて涅槃に導くための教説であるから、一見矛盾するかに見える教えでもその真意は一つである。本来はそれを明らかにしようとする方法が会通である。しかし江戸時代の会読・会通という学問方法は、言葉の意味やその典拠という解釈学的な関心に塗りつぶされていて、親鸞が『教行信証』で明らかにしようとしている仏道の真理性は何かという根本関心に欠け、いたずらに煩瑣で緻密な分別や理性の所産に退落していったのである。

このような『六要鈔』や先輩の講説を重んじる江戸期の解釈学的な真宗の研究方法を、東京帝国大学の宗教哲学で近代的な学問方法を身につけた清沢満之は、「註疏の上に註疏を重ね、解釈の上に解釈を加へ、本を捨てて末に趨り、源を忘れて流を趁ひ、反て益々聖教の正意に遠ざかるもの」(『清沢満之全集』・第七巻・一一六頁・岩波書店)と批判する。さらに『六要鈔』や先輩の講義の枠内で行われてきた研究方法に対しては、宗義(仏道の真理性)と宗学(それを論証する学問)を混同してはいけないと主張し、次のように言う。

> 先輩の一学轍を標準として、是非正不を決せんとするが如きは、不法の甚だしきものにして、毫も其理由なきものなり、而して諸氏が此の迷窟の裏に彷徨して自ら小にし、広闊なる自由討究の天地に游びて、大いに宗義を発揮すること能わざる所以のものは、蓋し其宗義と宗学とを混同するの謬見に基因せずんばあらず。(中略)故に宗学の境界に於ては討究上充分の自由を与え、決して束縛を加ふべきものに非ざるなり
>
> (『清沢満之全集』・第七巻・一一七頁・岩波書店)

先輩の学轍を標準にするのではなく近代的な自由討究という学問の方法によって、親鸞の明らかにした本願の道理に直入することを主張するのである。

清沢満之は肺患の身を戦場にして親鸞の信仰を戦い取った人である。信心を生きるという形で親鸞の仏道の真理性を表現すると同時に、精神界という機関誌にその思想を公にしていった。だから清沢は、親鸞が明らかにした浄土真宗という仏道をわが身に実験し、世間の分別や解釈を破って出世間の真実そのものへ直入するという態度を貫いて、親鸞に帰ったのである。要するに清沢満之は、平安末期から鎌倉期の混乱する時代の中で、親鸞が自らの実存を賭けて『大無量寿経』の説く涅槃の覚りに到達し、ついに『大経』の覚りを生きるものにまでなっていった、それと同じ方法論で仏道を学んだのである。それを一言で言えば、近代的な実験主義によって人間の理性や分別が持つ妄想を破って、自らの身で『大経』の仏道を体得したと言い得るであろう。

清沢満之は明治三十六年四十一歳の若さで亡くなった。この清沢の方法論を継承したのは浩々洞で育った彼の弟子達であるが、中でも曽我量深は清沢の方法論で『教行信証』の思想研究に生涯を捧げた人である。その業績は紙面の都合上割愛するが、「近代人として生きるわれわれが親鸞の仏道に直参しようとするならば、清沢満之以前に帰ってはなりません」という師の教えを、いつも念頭に置きながら研究を続けてきた者にとっては、曽我量深に始まる『教行信証』研究の成果を踏まえなければ『教行信証』は読めないと感ずることである。近代以前のものに依るのではなく、近代教学の成果に立って『教行信証』を読み直す時期にきているのではなかろうか。

このような学界全体の状況の中で、本研究が計画されたのである。すでに述べたように清沢満之・曽我量深の伝統とその成果を盛り込みながら『教行信証』全体の構造を思想的に明らかにし、その上で各巻の解読を進めたいと思うことである。

個人研究

国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究—かな書き朝鮮語に着目して

研究代表者・任期制助教　許　秀美

国立国会図書館に「朝鮮筆記」という写本が蔵されるが、その最も注目される点は、かな書き朝鮮語語彙を収録していることである。すなわち、その末尾の「朝鮮語右訳下訓」の条には、全270項目の漢字の標題語を掲げ、その右あるいは下にカタカナで朝鮮語語彙の発音が表記されている。本研究は、この新資料「朝鮮筆記」の文献学的検討をおこなうとともに、本資料に収録されているかな書き朝鮮語語彙に関して、同時期に編纂されたその他のかな書き朝鮮語語彙集と比較しつ

つ、ハングル表記の復元および音韻論的検討を試みるものである。

本書「朝鮮筆記」は、写本「加模西葛杜加国風説考」の後ろに合綴されているが、この「加模西葛杜加国風説考」には、「朝鮮筆記」のほかに、「文化元子年九月廿九日魯斯亜船渡来国王ヨリ我邦エ呈スルノ書」、「別勒空律安設戦記」、「或間海防漫記」、「琉球談抄書」、「無人島漂着者始末書」、「依崔天淙見殺之事従三使贈対州公之書」、「三使口上」、「傾蓋唱和録」、「鐵函心史抄書」等が収録されている。このうち「加模西葛杜加国風説考」、「文化元子年九月廿九日魯斯亜船渡来国王ヨリ我邦エ呈スルノ書」、「或問海防漫記」、「朝鮮筆記」の末尾には筆写年と筆写者の名等が記されており、それらが嘉永七年（1854）二月から三月の間に筆写されたことがわかる。本書の筆写者については、「望嶽」と「源崇広」の二つの名が見えるが、同筆のごとくであり、同一人物ではないかと推察されるが、それが何者なのかは未だ確認できていない。しかしながら、「加模西葛杜加国風説考」の中に、幕末の探検家最上徳内の言に拠ったと思われる注記があらわれること、さらに「朝鮮筆記」の書名が幕末の八王子千人同心松本斗機蔵が書き残した最上徳内の「蔵書目録」の中に確認できることから、本書前半部の「加模西葛杜加国風説考」と後半部の「朝鮮筆記」がともに最上徳内と何らかの関わりをもっているものと推測される。

「朝鮮筆記」は、「加模西葛杜加国風説考」全89丁のうち、8丁分を占める。内容のほとんどは、慶尚道の草梁倭館に関すること、対馬と朝鮮との交易に関することである。しかし、その順序・体裁については、朝鮮より日本へ送る品々の記述のあと、「白頭山ト云山咸鏡道之内ニ有」と、朝鮮の地理についての記述があらわれるも、すぐその後には、また倭館に関する記述に戻るなど、相当混乱した様相を呈している。なんらかの底本を筆写者が随意に抜粋し、部分的に筆写したためではないかと推される。その底本については、松本斗機蔵が書き残した最上徳内の「蔵書目録」にある「朝鮮筆記」が底本なのか、最上徳内の「蔵書目録」記載のもの以外にも別本が存在しそれを底本としたのか、目下不明とせざるを得ない。

「朝鮮筆記」の内容を略記すれば、以下のとおりである。

①対馬の家老や通詞の人数や俸禄
②日本から朝鮮へ、朝鮮から日本へ送る品々の品目
③朝鮮の地理
④慶尚道草梁倭館の様子と風俗
⑤対馬より朝鮮へ渡る船の構成
⑥倭館での勤務形態
⑦虎退治の記事
⑧朝鮮語右訳下訓

「朝鮮筆記」巻末の「朝鮮語右訳下訓」の条に収録された全270項目のかな書き朝鮮語語彙を「朝鮮筆記」と同時期の資料である「倭語類解」や「絵入り異国旅硯」、「朝鮮物語」などに収録されている朝鮮語語彙と対照してみれば、「風：プグ」、「女：ケチブ」、「栗：バム」などのようにその他の資料と同様の表記をおこなっているもの以外に、「波：バツシ」、「烟管：サイクアン」などのように、その他の資料とは異なる表記をおこなっているものや、「不食：ブシク」、「産子：ザンシ」、「賓客：ソンニムクワ」などのように、他の資料にはない標題語も多数含まれていることが確認される。また、「人：サラミ」、「身：モムイ」のように、助詞をともなった表記や、「死：ツウコ」、「行：カル」、「呑：モクチャ」のように活用形を表記しているもの、「帯：平人ハヒモ也貴人ハ右帯也是ヲセツヅイト云」という説明をおこなっているものも見受けられる。本書のかな書き朝鮮語には、「道：チリ」、「油：チリミ」など口蓋音化の方言的特徴や、「七：シリコブ」など「ㄴ」の出わたりの［d］、「餅：ステキ：」など語頭複子音の音価に関わる表記等が見られ、ハングルで書かれた朝鮮語の本国資料からはうかがえない音声的・音韻的特徴を伝える貴重な資料として注目される。

本資料には、いまだ解読できていない語彙も多数あり、それらの中には本資料初出とおもわれるものも含まれている。今後、これら未解読語彙についてのさらなる探求が必要である。

個人研究

プラトンの中期イデア論の生成

研究代表者・本学非常勤講師　西尾 浩二

本研究の目的は、古代ギリシアの哲学者プラトンが中期対話篇（『国家』など）で提示する形而上学的理論である「中期イデア論」に関して、彼の前期対話篇（『エウテュプロン』や『メノン』など）にまで遡ってその生成の背景を明らかにすることである。本研究は、平

成23年度から24年度までの科学研究費補助金（科研費）交付による研究であり、具体的な目的として以下の諸点が設定されている。(1)プラトンの前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い（「勇気とは何であるか」など、一般には「定義の探求」と解される問い）から中期イデア論が生成するには、どのような背景や要因あるいは動機があるのかを明らかにすること、(2)(1)の解明過程で前期対話篇のうちでもとくに「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』に焦点を当て、探求における定義の優先性やイデア論との関連をはじめとしてさまざまな論点から総合的に研究を行い、解説・注解付き翻訳を作成し公刊すること、(3)(1)(2)を踏まえて中期イデア論を捉えなおし、それにより中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てることである。このうち平成23年度はおもに(2)に力点を置いて研究を進め、関連文献の収集と先行研究の調査を行うとともに『エウテュプロン』の翻訳にも着手した。

具体的な活動として、まず先行研究の調査である。とりわけ探求における定義の優先性をめぐる問題について、主要な先行研究を網羅的に調査した。この問題は、たとえば「美とは何であるか」（美の本質あるいは定義）をまず知らなければ「何が美しいものか」（美の事例）も「美は有益なものか」（美の特性）も知ることはできない、といった立場がソクラテスのものであるのかどうか、またそうした立場が哲学的に正しいのかどうか、という問題である。プラトンの原典にはこの立場を示唆するように思われる箇所が複数見られる。だが他方で、ソクラテスは「何であるか」を知らないと主張するのだから、この立場は（対話篇でソクラテスがしているように見える）事例を用いた定義探求すら不可能にしかねないことになる。つまりこの問題は、ソクラテスの対話活動（「何であるか」の探求）の有効性、ひいては広く哲学的探求の有効性にかかわってくる。近年では、こうした立場（「ソクラテス的誤謬（Socratic fallacy）」とも称される見解）をソクラテスが実際にとっていたとするギーチの問題提起（Geach, P. T. (1966) 'Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary', *Monist* 50, 369–82）に端を発し、この問題をめぐる大きな論争が研究者の間に生じており、その論争はソクラテスにこの立場を帰する陣営とそうでない陣営に分かれて今もなお続いている。この問題に関する先行研究の調査の結果、従来の研究はいずれの陣営もほぼ共通して、（ギーチが論考中で示唆したとおりに）イデア論と切り離した形で問題の解明を模索していることがわかった。研究代表者はこの点に不備があるのではないかと考え、現在、イデア論の生成をも視野に入れた形での解明を試みているところである。

また、こうした先行研究の調査と平行して、前期対話篇のひとつである『エウテュプロン』の翻訳にも着手した。翻訳の底本には、オックスフォード古典叢書（Oxford Classical Texts）中のプラトン全集第一巻の新しいデューク版（E. A. Duke, W. F. Hicken, 1995）を用い、その際に旧来のバーネット版（Ioanenes Burnet, 1900）との異同にも注意を払っている。翻訳にあたっては、原典に忠実であると同時に現代の読者にも読みやすい訳文をつくるために、いくつかの工夫をした。まず多数のコメンタリー――古典的なアダム（J. Adam, *Platonis Euthyphro*, Cambridge University Press: Cambridge, 1890）やバーネット（J. Burnet, *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Clarendon Press: Oxford, 1924）から、最近のベイリー（J. A. Baily, *Plato's Euthyphro & Clitophon*, Focus publishing/R. Pullins Company, 2003）まで――を参照した上で、研究代表者自身も注解を新しく作成しながら翻訳作業を進めた。また多数ある英語訳と日本語訳をつねに参照し、いくつかのドイツ語訳とフランス語訳をも部分的に参照した。さらにまた、不定期ではあるが主として大谷大学総合研究所において、古代ギリシア哲学の専門家と会合を重ね、『エウテュプロン』と『メノン』について訳文と内容の検討をおこなった。これらの活動に加え、最新の研究状況を知るために学会（日本西洋古典学会、古代哲学会など）や研究会（古代哲学フォーラムなど）にも参加した。以上の研究成果を踏まえ、平成24年度は研究目的の(2)を達成することをめざし、さらにそれと平行して(1)と(3)の解明を進め、研究成果をとりまとめて学術雑誌で公表することをめざす。

個人研究

本地物語の研究
—菩薩行と誓願を視座として—

研究代表者・本学非常勤講師　箕浦 尚美

室町時代を中心とした短編の物語群であるお伽草子のうち、「本地物」と呼ばれる作品群は、一般に、「(一)主人公は多く神仏の申し子であるというような異常な出自をもち、(二)いったんは流離・艱難のもとに沈淪

するが、(三) 神仏の加護によって救済されやがて神仏になる」(荒木繁『語り物と近世の劇文学』桜楓社、1993年、初出1959年) と定義される。この性格を強く持つ本地物には、『神道集』所収話のように神を対象とするものと、本研究で中心的に取り扱う仏や菩薩を対象とするものとがあるが、いずれも、お御伽草子の時代を遡って存在する。

本研究の中心的テーマである仏や菩薩を対象とする本地物語のうち、特に重要なものは、以下の二話であると考える。

①善生太子の物語：原話は、平安期に日本で編纂されたと考えられる『大乗毘沙門功徳経』であり、『今昔物語集』巻五第二十二にも見える。喜見菩薩・大吉祥菩薩・多聞天・持国天の前世物語である。お伽草子『阿弥陀の本地』は同内容であるが、阿弥陀・薬師・観音・勢至の前世物語として描かれている。

②早離・速離の物語：原話は、平安期に日本で編纂されたと考えられる『観世音菩薩往生浄土経』であり、同話は、簡略ながら『宝物集』にも見られる。金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉や真源『往生要集裏書』(真福寺蔵) には、『往生仏土経』の説として掲載されている。阿弥陀・観音・勢至の前世物語である。近世初期には経典を絵巻化した伝本 (岩瀬文庫蔵) があり、影響を受けたお伽草子に『日月の本地』がある。

これらの物語は、苦難・捨身・誓願を経て、転生するという共通点を持っている。『法華経』『金光明経』などの大乗仏典において菩薩が身を犠牲にして誓願を立てる過去の因縁物語 (pūrvayoga) の影響下にあると考えられ、単純な転生の繰り返しとも言える初期仏教の本生経 (jātaka) とは異なっている。また、これらが、いかにも日本的な物語だと言われるのは、主人公達の受ける苦難が、幼い時期の親の死や継母による冷遇などの外部からの事情で生じた苦難であって、自ら行う菩薩行による苦難ではないという点である。捨身と誓願は、のちの本地物語にはあまり継承されなかったようであり、その理由の考察も研究課題の一つであるが、初期段階の作品として、まずはこの二つの物語の十分な考察が必要である。

また、以前に筆者が紹介した金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉(「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉翻刻」(『伝承文学研究』58、2009年)) は、上掲の早離・速離の物語を含め、同様の性格を持つ説話を多く含み、幼くして親を亡くした子どもの物語ばかりが仏や菩薩の前世物語として描かれている。釈迦とその家族 (浄飯王・摩耶夫人など) の前世として描かれる話がある一方、普賢・文殊・吉祥天・弥勒・多聞天などの前生物語も含まれており、本研究テーマに関わる重要な資料と考えている。

2011年度は、研究計画初年度の基礎研究として、以下の作業と研究を行った。

①平安期における菩薩行・誓願についての把握・分析。平安期の菩薩行・誓願が反映されている金剛寺蔵『百願修持観』(平安後期写) の分析を行った (「《百願修持観》之誓願観」(池麗梅訳) (鄭阿財等『仏教文献与文学』、仏光文化事業有限公司 (台湾)、2011年10月))。

②基礎作業として、菩薩に関する経典記事の抜き書きである金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉(平安後期写) の「菩薩」「菩薩名義」部分を精読した。

③平安期の本地物語や天竺説話における菩薩行と誓願の把握・分析。基礎作業として、『観世音菩薩往生浄土経』を精読した。

④中世本地物語の分析。お伽草子「本地物」の冒頭には、神仏に祈って子を授かる「申し子」譚を持つ作品が多いことから、お伽草子における申し子の具体例を調査・整理し、「本地物語における申し子譚の位相」と題して、口頭発表を行った (国際日本文化研究センター共同研究「夢と表象—メディア・歴史・文化」(代表・荒木浩) 平成23年度第5回共同研究会 2012年1月)。

⑤文献調査と情報収集。金剛寺・興聖寺等における聖教共同調査へ参加し、中世聖教の把握に努めた。「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究—聖教の形成と伝播把握を基軸として」(科研費基盤研究 (B) 23320054 代表・後藤昭雄) の平成23年度研究会 (京都国立博物館、2012年2月) において、「聖教の書写—金剛寺聖教の奥書について—」と題する発表を行った。また、金沢文庫・国文学研究資料館等において、関連資料の収集を行った。

今後の研究としては、『私聚百因縁集』などの諸説話集における仏菩薩の前生譚との比較分析を進め、菩薩行と誓願を含む本地物語がどのように展開していくのかを探る予定である。

個人研究

変動期の社会における法秩序の再構築
―南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授　阿部 利洋
（社会学）

紛争を経験した社会が、その後どのようにして司法の正当性を回復し、社会構成員の法的ニーズに応えていくのか。その過程で、どういった独特の問題が生じ、どのような反応が展開することになるのか。そうした社会における法秩序の再構築は、理論的にはどのように把握できるのか。これらの問いに対し、本研究は、南アフリカとカンボジアという対照的な社会を比較対象として取り上げ、社会学的な分析手法を用いて答えることを目的とする。また、このアプローチにより、従来、政治学的・法学的考察に限定されがちであった平和構築・「移行期の正義」研究に、新たな知見を提示することを目指す。

上記の目的のもとに遂行された昨年度の研究概要は次のとおりである。

南アフリカでは、ケープタウンにおいてカラードによる権利主張の近年の動向に関して、ジョハネスバーグにおいてアフリカ諸国からの移民が直面する問題に関して、それぞれ現地調査を行った。結果、一見すると別個の事例と思われる両者が、アパルトヘイト後の南アフリカにおける一連の社会再統合政策のなかで生じてきた、とする仮説的なフレームワークを得た。その成果の一端は、「南アフリカにおける和解政策後の社会統合」という論考にまとめ、公表した。

カンボジアでは、クメール・ルージュ特別法廷の社会的受容を分析する英文論集刊行の企画を開始した。報告者を含め６名の執筆者が実証主義的アプローチに基づき、従来主流の法学的・政治学的な議論とは異なる考察を提出することを目的としている。具体的には、「法廷における量刑の可能性に関して国際法上の解釈にもとづいた議論を行う」といった方向性ではなく、「さまざまな条件や制約をともなう特別法廷の進行が、当該社会の構成員にどのように受け止められたのか」、という観点から社会学的な分析を行う。昨年度は、担当者との打ち合わせのほかに、法廷関係者への聞き取り、NGOによるアウトリーチ資料の閲覧、新聞とテレビを中心とするローカル・メディアの報道分析を実施し、ローカル・オーナーシップおよびメディアによるアジェンダ・セッティングに関する論考を執筆した。

比較研究の理論的側面としては、前年度から継続中の移行期正義論の網羅的な把握を踏まえて、南アフリカの真実和解委員会とカンボジアの特別法廷の相違点と共通点、そしてこの認識が移行期正義論に貢献する点を主張する論文を執筆した（2012年５月公刊）。この論文は、紛争後社会が法秩序の再構築をめざす際の起点となる社会的プロジェクトの分析を行ったものである。この論文の考察を通じて、「持続的な社会的効果をもたらす条件が何であるのか」、「プロジェクト外部の要因との相互作用を整理するフレームワークがどういうものか」という課題を得た。

昨年度の成果は以下のとおり。

[論文４点]

1．「紛争後の治安回復――南アフリカのコミュニティ・ポリシング」、『紛争と国家形成――アフリカ・中東からの視角』（佐藤章編、アジア経済研究所）137－171頁、2012年１月

2．「帰還者が喚起するコミュナリティ――カンボジア特別法廷における被害者カテゴリーの創出」、『実践としてのコミュニティ』（平井京之介編、京都大学学術出版会）311－336頁、2012年２月

3．「プロセスあるいは触媒としての和解――紛争後社会における和解概念をどうとらえるか」『紛争と和解――アフリカ・中東の事例から』（佐藤章編、アジア経済研究所）19－39頁、2012年３月

4．「南アフリカにおける和解政策後の社会統合――移民排斥問題とカラード・アイデンティティ・ポリティクスの台頭」『紛争と和解――アフリカ・中東の事例から』（佐藤章編、アジア経済研究所）127－173頁、2012年３月

[口頭発表４回]

1．「南アフリカにおけるコミュニティ・ポリシングの展開と課題」、日本アフリカ学会第48回学術大会（於・弘前大学）、2011年５月

2．「カンボジア特別法廷とローカル・オーナーシップ――NGOフォーラムを事例として」、第84回日本社会学会大会（於・関西大学）2011年９月

3．「南アフリカ真実和解委員会の活動とその後」、「アフリカにおける紛争と共生」研究会（於・京都大学楽友会館）2011年11月

4．「南アフリカにおける和解政策後の社会統合――移

民排斥問題とカラード・アイデンティティ・ポリティクスの台頭」、「紛争と和解――アフリカと中東の事例から」研究会（於・上智大学）2011年12月

個人研究

民族文化祭の比較研究

研究代表者・教授　飯田 剛史
（社会学）

2011年度に行われた、日本社会学会大会での共同報告『民族祭りと多文化共生の展開』の報告要旨をもって本報告にかえさせて頂くことにしたい。これら３報告は、科研プロジェクト『民族文化祭の総合研究』として行われた調査と研究に基づくものである。

共同報告『民族祭りと多文化共生の展開』

1．民族祭りと多文化共生の展開・概説

飯田剛史（大谷大学）
藤井幸之助（神戸女学院大学）

①目的・方法

民族祭りの展開および現況を共同研究し、資料を示して概説する。

○資料「民族祭りおよび文献リスト」

藤井幸之助　作成

②民族祭りの展開

民族祭りとは、日本に定住する多様なエスニックの人々が、その民族文化を公の場で祭りの形で表現する社会・文化運動である。この運動は、1980年代に大阪で在日コリアンによって始められた。すなわち1983年に発足した「生野民族文化祭」は、プンムルなど韓国の伝統民俗文化を中心演目にして、民族的アイデンティティを強く主張するものであった。85年発足の「ワンコリア・フェスティバル」は、一つのコリアを標榜して、様々なジャンルの在日ミュージシャンが野外ステージで演奏する。90年発足の「四天王寺ワッソ」は、朝鮮半島からの渡来人によって古代の日本に豊かな文化が伝えられたことを大規模なパレードと儀式によって再現する。

90年代以降、多様な形態、主旨、実行団体による民族祭りが展開し、プンムルを中心演目とする10余りの「○○マダン」と名乗るグループに加え、今日約60にのぼる祭りが関西地域を中心に全国で開催されている。これらの祭りには、今日では日本人もそのスタッフに加わり、また、ブラジル、アルゼンティン、中国、フィリピンなどからのニューカマー住民も参加するものが増加してきている。民族祭りは、地域における多民族・多文化共生を目標として掲げるものが増え、地域の新たな結びつきと意識を生みだしてきている。

③「祭り」の意味再考

これらが「祭り」であることの意味を問い直したい。すなわち、民族祭りは、地域をめぐるさまざまな立場の人々が、集合的な歓びの経験を共通の核として、持続的なネットワークを展開しつつ、社会・文化・政治の様々な活動次元を巻き込む全体的社会事実（M.モース）である。また参加者は祭りの場で、持てるものを自発的に与えつつ全く異質な〈なにものか〉を受け取る。民族祭りはこのように全体的給付の新たな一単位とみることもできる。そして共同研究の持続の中で、祭りごとに、新たな運動体として諸次元の独自な連関を生み出し、どのように地域のあり方・意識を変えつつあるかをさらに追及してゆきたい。

2．「東九条マダンにみる〈存在の政治〉の論理」

山口健一（福山市立大学）

―内容省略―

3．「民族まつりコンテンツ」の分析―京都・東九条マダンの事例より―」　小川伸彦（奈良女子大学）

―内容省略―

個人研究

世界史における東アジアとアフリカ
―国際共同研究のための基盤形成―

研究代表者・准教授　古川 哲史
（歴史学／比較文化・社会論）

本研究は筆者が現在まで取り組んできた＜第二次世界大戦期までの日本－アフリカ関係史＞の研究成果を

出発点に、対象地域を東アジア（主に中国、朝鮮半島、日本）にひろげて、19世紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカとの関係を世界史的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、その関係性について歴史学および歴史哲学的考察を試みる。本研究は、理論かつ実証面での個人研究活動であるとともに、この大きなテーマを国際的な規模で論じるための国際共同研究を組織、開始させる意図もある。さらには、筆者の将来的課題の一つ＜世界史における東アジアとアフリカ、アフリカ系ディアスポラの研究＞（East Asia and Africa, and the African Diaspora in World History）に結びつけるという展望を持つ研究である。（本研究は筆者が代表の科学研究費補助金（科研費）による研究でもある。）

本研究の基軸のひとつとなる日本－アフリカ関係史の研究は、日本におけるアフリカ史学の乏しさもあり、先行研究はまだ少ない。筆者は今まで、アフリカ諸国や欧米などの研究者による関連研究も含めて、その既往の研究概観や意義・問題点の分析をいくつかの機会で行ってきた。（例えば、拙稿「2007年の歴史学界：回顧と展望――アフリカ」、『史学雑誌』117編第５号、史学会、2008年、同「日本－アフリカ交渉史の諸相を考える――いくつかの研究課題と展望」、『アフリカ研究』72号、日本アフリカ学会、2008年、同「書評：藤田みどり『アフリカ「発見」』岩波書店、2005年」、『アフリカ研究』68号、2006年、等である。）日本－アフリカ関係史あるいは関係論研究では、関係が生じた時期の同定など、基本的な事実関係が曖昧なままにされている場合があり、それが他の研究者の論考にまで引用・利用されている問題もある。したがって本研究では、アフリカ人の姓と名の取り違えや現地の暦と西暦の換算の誤りといった点も含めて、先行研究で使われている史・資料の再検証作業を含む。

研究計画の２年目にあたる2011年度は、主たる活動として、先行研究の調査・収集およびその概観と検証を行うとともに、関連の史・資料や情報の収集を国内外で続けた。これらは次年度以降も継続して行われる作業である。（とくに日本－アフリカ関係においては、コーヒーやファミリーレストランの白身魚といった食物、あるいは原子力発電所のウラン燃料などもその対象としたい。）その上で、具体的な考察や論文執筆段階に入ることになる。なお、本年度に公刊した関連の拙稿に次のものがある。

古川哲史「アフリカ史――精神と学界の脱植民地化に向けて」（『歴史と地理』651号、山川出版社、2012年２月、32–35頁。）は、日本の歴史学の流れを考慮しつつ、日本語で読むことのできるアフリカ史の代表的な概説書や書物を短評・紹介したもの。執筆依頼の目的に沿い、高等学校教員や高校の歴史教育現場を意識したものである。Furukawa Tetsushi, "Book Review: Ishikawa Hiroki, *The Rise and Fall of Solomonid Ethiopia: Reconsideration of Its History after the Oromo Migration,*" (*Nilo-Ethiopian Studies,* No.17, March 2012, pp.64–66.) は、日本ナイル・エチオピア学会（Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies）の英文学術誌での石川博樹『ソロモン朝エチオピア王国の興亡――オロモ進出後の王国史の再検討』（山川出版社、2009年）の書評である。本稿では、この課程博士論文に基づく学術書が、長い歴史を持つエチオピア王国史の中でソロモン朝（1270年–1769年）に焦点を当て、皇帝の年代記などゲエズ語（古典エチオピア語）史料、キリスト教布教に訪れたイエズス会の文書、イギリスはじめヨーロッパの資料などを精緻に読み込み、エチオピア史研究に新たな貢献をしたと評した。

個人研究

チベット仏教における論理学の研究

タルマリンチェン著
『量評釈の釈論・解脱道作明』
第１章の和訳研究について

研究代表者・名誉教授　白館 戒雲
（仏教学）

インド大乗仏教の論理学は、ディグナーガ（陳那.. 西暦480–540年頃）の主著『集量論』により大成された。彼の孫弟子ダルマキールティ（法称.. 600－660年頃）は主著『量評釈』においてそれを解説し、外道者からの批判にも答えた。彼らの思想は外道者にも衝撃を与え、インドの学問寺では必ずこの論理学が学ばれ、中観、唯識の哲学をも基礎づけた。

11世紀、この論理学はチベットにも導入された。多くの註釈文献が翻訳され、ダルマキールティの『量決択』を中心に学習された。13世紀初め、インド仏教が滅亡し、最後の指導者シャーキャシュリーバドラがチベットに亡命し、その学問を伝えてから、『量評釈』が中心

になった。インド撰述文献のチベット語訳が活用され、多くの註釈書が著された。14世紀後半から15世紀初めにはツォンカパが出て、ゲルク派を創始したが、彼の中観哲学も、ナーガールジュナ、チャンドラキールティの思想を、ダルマキールティの論理学と統合したものである。彼の法嗣タルマリンチェンが『量評釈』へ大きな註釈『解脱道作明』を著し、その伝統がチベット、モンゴルの多くのゲルク派の学問寺に継承され、数多くの註釈を生み出した。

欧米では20世紀前半より、その学問仏教の伝統の豊かな成果が、それを継承する学僧たちの協力を得て学習され、近現代の仏教研究の一翼を担ったが、日本でチベット撰述文献をそれ自体として研究する態勢が整ったのは最近のことである。また、近年、埋没していた古い文献類の目録が作成され、公刊されつつあるので、論理学・認識論の領域においても、古い記述を参照し、その流れを俯瞰し研究することが可能になりつつある。

『量評釈』第1章「自己のための比量（推理）」は、ディグナーガ著『集量論』の章立てを改めた特別の議論である。比量（推理）は「自己のため」と「他者のため」の二種類であり、「自己のための比量」は「因の三相」に基づいた対象の認識である。それは比量であるかぎり実在に直接的に関係しない錯誤であるが、実在に根拠を有しており、欺かない効果を持つから、「量（認識基準）」である。ディグナーガは、論証因の条件「因の三相」すなわち、論証因は推理対象に必ず存在していること、推理対象と同類のものにのみ存在していることと、同類でないものには決して存在していないことを提示したが、ダルマキールティは、論証因は推理対象とその同類にのみ存在していることが決定することと、推理対象と非同類のものには存在しないことが決定していることという必然性を、明確化した。そして、関係は、自性（本体）が同一である関係と、因果の関係の二種類であること、論証因は、肯定的推理における果の論証因と自性の論証因、否定的推理における非認識の論証因（仏教教義の中心である無我や空性の論証にとって大きな意味がある）という三種類であることを、示した。

これらよりさらに議論が展開される。まず「アポーハ（除去）」論では、外道者が言語や思考を肯定的なものだと主張するのに対して、その対象以外のものの除去という否定的なものであることを明らかにし、言語と実在の区別を明確化した。聖典論では、バラモンたちの聖典ヴェーダの非人為性、恒常性を徹底的に批判し、伝達の意志に基づいた言葉により真実は伝達されることを論じた。

本研究者は若き日の学僧として伝統を継承した後、来日して近現代の研究方法をも学んできたが、本研究では、『量評釈』とそれに対する最重要の、タルマリンチェン著『解脱道作明』を対象とし、註釈文献を参照して語義と内容を解明し、翻訳研究した。

第1章の註釈としては、インド撰述として、ダルマキールティ自身の註釈と、シャーキャブッディとシャンカラーナンダによる二つの復註がある。『量評釈』の語義、内容の把握において、これらを頻繁に参照し、ほぼすべての本頌について註釈文献の対応個所を示した。しかし、分量があまりに多い。そこで重要なのが、『解脱道作明』を継承するゲルク派の学僧たちの註釈である。重要なものとして、ダライラマ1世の註釈は『量評釈』の逐語釈であり、インドの文献の読み方を継承しており、本頌を把握するために有益である。セラ・ジェツンパの註釈は、『解脱道作明』を踏まえつつ、インドの註釈文献を引用し、問題点を整理し、詳説している。チベットの古い文献にも論及しているので、内容の考察において重要である。モンラムペルワの註釈は、ダライラマ1世より詳しいが、問題点をまとめている。パンチェン・ソナムタクパの註釈は、セラ・ジェツンパに比肩しうるが、異論をも提示している。

これらを参照することにより、『量評釈』本頌を的確に読むこと、『解脱道作明』の要処、問題点、さらにインドの註釈文献の間の異論などを、効果的に把握することができた。さらに大部の索引をも作成した。先の第2章、第3章に続いて第1章全体を翻訳研究し、拙著『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅲ』（人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、2012）として、公刊できた。

個人研究

高次脳機能障害者とその家族のピアサポートによる自己と関係の変容に関する発達的研究

研究代表者・教授　脇中　洋
（発達心理学・法心理学）

本研究は、高次脳機能障害者のピアサポート実践を通じて新しい回復理論の構築をめざし、医療や福祉行政に対して関係発達論的観点から新たな回復モデルの

提供を図ろうとするものである。2011年度は以下の研究実績を残した。

(1)ピアサポート実践活動の社会的実装

概ね週１回以上のピアサポート実践と月例ピアサポーター委員会を実施して記録に残し、自己と関係の変容を示す事例の収集に努めた。ピアサポート実践活動は、新たに養成したピアサポーターが中心となって、NPO 大阪脳損傷者サポートセンターの定期的活動として定着し、その中から当事者の自主的クラブ（ランチの会、陶芸、手芸、習字、音楽）活動へと発展した。

また秋には大阪府立大学作業療法士科の学生ボランティアを動員して当事者とその家族の合宿を催し、来年度以降の定例合宿に向けて、学生らと共に実行委員会を立ち上げた。

(2)現場専門家を対象とした研究会の開催とまとめ

生活施設や就労支援施設、ハローワークといった高次脳機能障害者と向き合う現場専門家を対象とした事例検討研究会を４回開催して地域との連携を深め、年度末には大阪府立大学中之島キャンパスにおいてフォーラムを開催した。

(3)カナダのピアサポーター専門家との学術交流と学会発表

これまで交流を進めてきたVBIS（Victoria Brain Injury Society）のスタッフと事例情報を交換し、カナダバンクーバーで共同して学会参加と発表をした。

2009年度から３年間におよんだ日本学術振興会・基盤研究（C）（課題番号21530708）の研究達成度としては、2010年度に計画していたカナダのピアサポート専門家と共同で学会発表する計画が2011年度末にずれ込み、これまで蓄積してきたピアサポート実践記録を論文化することが大幅に遅れることになった。その一方で、高次脳機能障害ピアサポート活動は、養成してきたピアサポーターがその後就労していき、開催した研究会を通じて地域支援の専門家との連携が進展して、当初の計画以上に社会的実装を十分に果たせたと言うことができる。

本研究は社会的実装の側面では十分にその役割を果たせたが、学術的側面での成果（理論化と論文化）は不十分である。また研究の過程で、高次脳機能障害者に特化したピアサポートから、触法知的障害者の地域定着支援に対してもピアサポートの有効性を検証して社会的実装を果たす方向へと向かいつつある。そこで今後の研究の推進方策としては、新たに社会福祉領域で「触法知的障害者の更生と地域定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価」と題した研究テーマで2012年度からの科研費助成を受け（基盤研究（C）課題番号24530750）、さらに領域を拡げた研究に取り組むこととなった。

［学会・研究会］

脇中洋，Alex Gilchrist，中塚圭子（2012年２月16日）'Brain Injury Peer Support in Japan.' 22nd Pacific Coast Brain Injury Conference. Vancouver, BC, CANADA

脇中洋（2012年３月20日）「生きる場での回復をめざして　現在の自分を生きる　他者と共に生きる」第13回高次脳機能障害地域生活サポート研究会フォーラム　大阪府立大学・中之島サテライト

個人研究

フレデリック・ダグラス晩年のマスキュリニティ言説とアメリカ社会における人種表象

研究代表者・前任期制助教　朴　珣英

本研究は、19世紀アメリカで奴隷の身分から黒人解放運動の思想家・作家・活動家となったフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass: 1818–95）に関する筆者の文学および文化史的研究を発展させたものである。本研究の最終年度である2011年度は、初年度の成果をもとにダグラスの奴隷体験記や小説、回想録、その他の資料にみられる人種およびマスキュリニティに関わる言説に焦点を当て、その特質および19世紀末から20世紀に至る世紀転換期のアメリカ社会の人種表象を明らかにすることを試みた。さらには、ダグラスの人種に関わる言説が、現代アメリカ社会においても影響を及ぼしている点を論じた。

フレデリック・ダグラスは奴隷制廃止運動の活動家としての最初期から、当時否定されていた黒人男性のマスキュリニティを強調することが、黒人の解放と社会的地位向上において有効であると考えていた。このことはダグラスの最初の自伝かつ奴隷体験記 *The Narrative of the Life of Frederick Douglass*（1845）および中編小説 "The Heroic Slave"（1853）などを論じた既往の研究からも明らかである。しかし南北戦争終結後、ダグラスはマスキュリニティ言説をもはや戦略的には用いなかったとする見方が一般的である。そこで本研究ではそのような説を詳細に検討し、先行研究では網羅さ

れていない一次資料および二次資料の文献研究にも取り組み、従来僅かしか考察されてこなかったダグラス晩年のマスキュリニティ言説とその意図を明らかすることを目的とした。また、女性解放運動にも積極的に関わったダグラスが、自身のマスキュリニティ言説を状況に応じて変容させた背景にある社会情勢、世紀転換期アメリカ社会における人種表象の特質をも明らかにすることを狙いとした。

本研究は文部科学省科学研究費補助金（科研費）交付の研究（若手研究B・アメリカ文学：2010–2011年度）でもある。2011年度の主な研究成果は以下のとおりである。

1．里内克巳編著『バラク・オバマの言葉と文学——自伝が語る人種とアメリカ』、彩流社、2011年9月、総xii＋281頁。（第2章：朴珣英「人種の壁を越える試み——フレデリック・ダグラスからバラク・オバマへ」、87–130頁。）

本書は、現アメリカ合衆国大統領であるバラク・オバマが青年期に著した自伝的回想録 *Dreams from My Father: A Story of Race and Inheritance*（1995, 2004）についての論集である。日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム〈バラク・オバマの自伝を読む——文学研究からのアプローチ〉（講師：里内克巳、朴珣英、松原陽子、戸田由紀子、ウェルズ恵子）に基づくもの。

担当論文では、フレデリック・ダグラスからバラク・オバマへとつながる人種に関連するアメリカ黒人の知的伝統に関する考察をおこなった。特にダグラスの人種に関わる言説が、現代アメリカ社会においても影響を及ぼしている点に注目した。現在、アメリカ合衆国ではバラク・オバマ大統領の誕生により、社会の変容のみならず、「黒人」や「アフリカ系アメリカ人」とは何かなど人種や民族をめぐる議論が新たな形で登場している。そういった背景を踏まえ、本論では若き日のオバマが自己形成の上で大きな影響を受けたアメリカ黒人の知的伝統に焦点を当てた。その伝統は、20世紀の公民権運動時代のキング牧師やマルコムXあるいは近代黒人解放運動の父と呼ばれるW・E・B・デュボイス以前の、19世紀奴隷制廃止運動時代のフレデリック・ダグラスにまで遡ることができることを明らかにした。

2．チャールズ・ヴィラ・ヴィセンシオ著（北島義信監訳）『南アフリカの指導者、宗教と政治を語る——自由の精神、希望をひらく』、本の泉社、2012年3月、総431頁。

本書は Charles Villa-Vicencio, *The Spirit of Freedom: South African Leaders on Religion and Politics*, Berkeley: University of California Press, 1996. の翻訳書である。「シェリル・カルロス：政治ではなく闘争」、（96–113頁）、「ファティマ・ミーア：イスラーム教徒であり、女性であること」、（264–277頁）の二章を翻訳担当した。

個人研究

タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　清水 洋平

東南アジアの大陸部で長らく書写され、伝承されてきた貝葉や折本紙による仏典写本は、現在、一部の寺院の経蔵に無差別に保管されているものも多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕している。このような状況を危惧し、研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

当該研究分野のこのような状況のもと、本研究は、今まで調査が手薄であったタイ国中部地域の王室寺院に所蔵されているクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア撰述の仏教説話写本の研究を行う。既に知己を得たタイ国の研究者や僧侶と協力して、同地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献の特色を明らかにし、また、個々の写本研究を遂行する。特に、本研究活動の中から、今後の仏教説話写本研究の基礎となる東南アジア撰述仏典写本のデータベース構築を第一義の目的とする。

本研究は、従前の科学研究費補助金（科研費）プロジェクト「『パンニャーサ・ジャータカ』を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究」（特別研究員奨励費19・8876）を承けているため、先ず、そこで収集した約1,600套（1套の中に複数の文献が所収されることが多い）を超える貝葉写本集成の文献情報と約4万枚近くのデジタル画像をもとに、東南アジア撰述の仏典写

本に着目し、タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献の所在目録・データベースを完成させる。次に、仏教説話文献をより深く探究する手段として、その鍵となる 'Ānisaṃsa' と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の基礎的な文献研究を行うという２つのアプローチを取る。

本年度は、先ず、昨年度末（2011年２月７日～２月28日）に実施したバンコク所在の第１級王室寺院 Wat Arun Ratchawararam（通称 Wat Arun）の所蔵写本調査において、そこで得られた約160套の収蔵貝葉写本集成についての文献情報の取りまとめを行った。

次に、東南アジアの仏典写本のカタログ作成の第一人者である Jacqueline Filliozat（Honorary lecturer, École Française d'Extrême-Orient: EFEO）女史の尽力により、パリ所在のフランス極東学院（EFEO）が所蔵するタイ国中部地域に流布した東南アジア撰述仏典写本についての調査許可が得られた。よって、2011年８月17日～８月26日に同女史と共に調査を実施した。同学院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本のうち、*Suttajātakanidānānisaṃsa*（EFEO PALI 35, 130）などの 'Ānisaṃsa'に関する文献のほか、その他多くの稀覯文献と考えられる写本文献をデジタル画像資料として収集することができた。これにより、個々の写本文献研究を進める上での第一次資料の資料充実が図られた。

これらの海外現地調査を実施しながら、現在収集済みである、タイ国中部地域に所在する第１級王室寺院 Wat Mahathat Yuwaratrangsarit、Wat Arun Ratchawararam、第２級王室寺院 Wat Ratchasittharam、第３級王室寺院 Wat Yai Suwannaram、Wat Thepthidaram の所蔵貝葉写本集成を軸とする約1,700套を超える写本文献の情報について、それらすべてのデータ入力を終了し、所在目録を作成した。これにより、現在まで殆ど実態が不明であったタイ国中部地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献について、その特徴を明らかにした。

尚、本年度は、現在収集済みである上記の Wat Ratchasittharam が所蔵する貝葉写本集成の文献情報などを取りまとめ、その報告を『タイ国ワット・ラジャシッダラム寺院他所蔵写本に基づく蔵外仏典の研究』（2009年度～2011年度科学研究費補助金（科研費）（基盤研究(C)）研究成果報告書：研究代表者　畝部俊也（名古屋大学大学院文学研究科准教授））に掲載した。また、パリ所在のフランス極東学院（EFEO）が所蔵するタイ国中部地域に流布した東南アジア撰述仏典写本についての現地調査については、その報告を『大谷大学真宗総合研究所研究所報』第59号に掲載した。その他、特定の文献について、複数の写本を校合し翻訳研究を行い、その成果を『佛教研究』第40号に掲載した。

個人研究

ツォンカパ中観思想の基礎的研究

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教学）

１．研究目的

本研究の目的は、チベットを代表する仏教哲学者であるツォンカパ・ロサンタクパ（1357–1419）の中観哲学の正しい理解を得るために、その主要な中観関係の著作の、できる限り正確な和訳と注解を提供することにある。ツォンカパの全哲学体系は、中観思想の空の理解を基礎にしている。しかし、それを表現するツォンカパの文章は難解であり、それを正しく読解するためには、正確な文法的理解、議論の文脈の理解、チベット人による伝統的な解釈の知識などが必要である。さらに、それらによって得られた解釈を適切な日本語で表現する努力も要求される。これまでにも優れた英訳や和訳が存在し、出典などの文献的な調査も十分に行われてきたが、上の諸点に基づくテキスト読解とその表現については、新たな試みを行う余地があると思われる。本研究においては、チベット語と対照させて読むことによってチベット語の学習に資し、また独立に読むことで、思想内容を正確に理解できる訳文を作成し、今後のツォンカパ中観思想研究の基盤を固めることを目指した。

一年間の本予備研究において取り上げたテキストは、ツォンカパの中観思想を述べた独立の著作のうち、ツォンカパが晩年に自らの顕教思想をまとめた『菩提道次第略論』の毘鉢舎那章である。文献学的な注記よりも、文法的な理解とコンテキストの読解の正確さ、それらを的確に反映した日本語の訳文と、翻訳によって失われてしまう意味を補足する注記を作成する。

成果は順次 Web 上で公開していくほか、そこに含まれる思想内容についての研究論文としても発表していく。

２．研究過程

本研究は、三つの作業に分けて行った。一つは諸資

料の収集、整理、および作業用プリントの作成などの準備作業である。これについては研究代表者の指示のもと、アルバイトに依頼した。次は講読会を通じてのテキストの読解作業である。実際には、講読会においてテキストの解釈を討議したわけではなく、研究代表者のテキストの解釈を言語化することによって、難解なテキストを論理的、かつ文法的に説明する機会が与えられることに意味がある。講読での解説を元に訳注を作成する。第三に、ツォンカパの中観思想の後期の特色の一つである二諦説について、他の文献も参照しつつ考察を行い、その成果の一部は論文にまとめた。

3．研究結果概要

3．1　作成した資料

ツォンカパの著作の中でも、『菩提道次第広論』や『善説心髄』には後代の詳細な註釈が残されている。残念ながら本研究で扱った『菩提道次第略論』には註釈はないが、当然、『広論』と『略論』には対応する箇所があり、そのような箇所では『広論』の註釈は重要な資料となる。また、『広論』と『略論』とで共通に引用されているインドの原典も多く、それらについても、『広論』の註釈を参照することで、ツォンカパ（あるいはゲルク派）の思想内容に即した理解を得ることが出来る。これらについて、TBRC の PDF を A3 の用紙にプリントアウトし、必要な科段に線を引き、また科段を抜き出す作業をした。『広論』と『略論』の対応箇所のリストアップも行った。その他、必要な資料などの PDF を作成または収集をした。

3．2　思想研究

二諦説は、中観思想の存在論的枠組みをなしていると言える。「学説綱要書」において各学派の学説は、土台、道、結果という三つの節に分けて記述されるが、その土台とはその学派の存在論に相当し、その中心テーマが二諦なのである。ツォンカパの二諦説は、『菩提道次第広論』と『善説心髄』を中心とする前期と、『正理大海』『菩提道次第略論』『密意解明』を中心とする後期とでは説き方が変化している。特に『菩提道次第略論』の毘鉢舎那章は、『広論』を大きく書き直している。中でも二諦説の記述が最も異なっている。その後期の二諦説について「kun rdzob bden pa'i ngo bo と don dam bden pa'i ngo bo」（『印度学仏教学研究』61に掲載予定）と「ツォンカパ後期中観思想における二諦の同一性と別異性」（『真宗総合研究所紀要』に投稿予定）を研究成果の一部として執筆した。

3．3　訳注作成

講読会の内容を元に『菩提道次第略論』の毘鉢舎那章の訳注をとりまとめている。当初は文法的解説、論理の展開についての注記も含める予定であったが、時間的な制約や、量的にも膨大になるため、注記は必要最低限に留め、訳文に工夫を凝らして原文の文法的な構造や、訳語の対応などが分かるようにして、学習教材としての使用にも耐えるように配慮している。その成果は随時 Web サイト（http://tibet.que.ne.jp/tsongkhapa/）で公開する。

4．今後の課題

同様にして『善説心髄』の中観章、『菩提道次第広論』の毘鉢舎那章の訳注を作成する。両者とも、ゲルク派の伝統に基づく詳細な註釈が残されているので、できる限りその伝統を再現すべく、訳文の中に反映させていきたい。

また、『菩提道次第略論』の毘鉢舎那章は、ツォンカパの後期中観思想の最もまとまった体系的な記述となっているので、その議論を分析することにより、最終的なツォンカパの中観理解を構造的に理解することが出来ると思われる。それについては、訳文とは別にまとめたい。

個人研究

アメリカの公共図書館における専門職制度の総合的研究：専門職と非専門職の枠組み

研究代表者・教授　山本 貴子
（図書館情報学）

我が国の公共図書館界では、専門職と考えられる職務と一般的なそれとをあわせたものが司書の職務として認識されており、司書の職務における専門職の枠組みが不明確である。一方、アメリカでは、図書館の職員が、その職務の内容から、ライブラリアンと図書館サポートスタッフという名称で専門職と非専門職に区別されており、社会的にも両方の存在が認知されている。さらに、ライブラリアンのみならず、図書館サポートスタッフの養成教育も約40年の歴史を持つ。

このテーマについては、既に、漢那憲治氏（龍谷大

学教授)、大城善盛氏（花園大学非常勤講師)、瀬戸口誠氏（梅花女子大学准教授）などと共同研究し、「ALA の図書館情報学教育認定基準2008年版に関する考察—1992年版の改定と課題を中心に—」、「アメリカにおける図書館職員の要件と資格」など、４本の論文を執筆した。しかしながら、現在の研究は文献調査のみであり、実態の把握がまだ十分になされていなかった。そこで、本研究では、アメリカの公共図書館におけるライブラリアン及び図書館サポートスタッフの職階・職務及び資格と養成法の実態を調査した。

本研究では、ケンタッキー州を対象とした。ケンタッキー州には州法と「ケンタッキー公共図書館基準」があり、奉仕対象の規模による職員の人数や職員の資格まで詳細に規定されているからである。調査対象機関については、州立図書館、規模の異なる市立図書館、専門職・非専門職の養成機関、すなわち、Kentucky Department for Libraries and Archives、Lexington Public Library、Paul Sawyier Public Library、University of Kentucky および大学図書館、Bluegrass Community & Technical College および短期大学図書館、Northern Kentucky University および大学図書館を取り上げ、2011年９月４日から14日まで調査を行った。

まず、本研究チームのホームページを作成し、あらかじめ調査対象機関へ電子メールで聞き取り調査を行った後、訪問調査を行った。内容としては、アメリカの公共図書館界における専門職（ライブラリアン）及び非専門職（図書館サポートスタッフ）の職務とその養成であり、そのシステムのメリットや課題について明らかにした。

９月５日に、Keeneland 図書館長、University of Kentucky の特別蔵書部長及び同大学貴重書修復図書館員、龍谷大学漢那教授、花園大学大城講師、山本で懇談し、ケンタッキー州の状況を把握した。９月６日は午前中、Lexington Public Library を訪問し図書館職員について調査し、午後は、同公共図書館の分館の一つである Tates Creek Branch Library において、分館職員の採用方法や職階・職務についてと Lexington Public Library（本館）との関係について聞き取り調査を行った。９月７日午前に Kentucky Department for Libraries and Archivesで州立図書館長などと面会し、ケンタッキー州全体の網羅的な情報や最新の統計、マニュアル類を入手し、Lexington Public Library などの公共図書館との関係や、州内の大学における図書館職員の養成方法についても話を聞いた。午後、Paul Sawyier Public Library を見学し、図書館サービス（特に、児童サービス）と職員の関係、および専門職員に求められる能力について調査した。９月８日は午前に University of Kentucky において、図書館情報学部部長などからケンタッキー州内での図書館員の養成方法としてのオンライン・ラーニングについて、詳細を聞いた。また、ランチ・ミーティングでは、学生約30名との討論会が開かれた。午後は、University of Kentucky Library の見学と、図書館職員の職務などの調査を行った。９月９日午前中、Bluegrass Community & Technical College へ行き、同短期大学を含む３機関の、図書館職員養成についての関係を聞いた。その後、同大学の図書館本館と分館１館を見学した。９月12日は午前に Northern Kentucky University の副学長たちと会い、図書館職員養成及び継続教育に関するカリキュラムの詳細を聞いた。特に、図書館職員の職務や職階についての具体的内容は、プライバシーにも関わるものであり、現地でなければ入手することはできない情報が含まれた。この出張で大きな成果があったと考える。

現地調査の際、会議の内容を IC レコーダで記録したのでその内容と、調査結果の分析とを含めて、2012年１月に中間報告としての論文を作成した。

また、本研究に共同研究者として参加された漢那憲治氏、大城善盛氏、日沖和子氏（ケンタッキー大学図書館）らを招き、2011年12月10日、2012年１月13日に公開研究会を開催してその成果を発表した。３月に、本研究も含めた一連の論文について論文集を発行し、最後に、３月14日から15日にかけて、漢那憲治氏、大城善盛氏、瀬戸口誠氏、中島幸子氏（梅花女子大学特任教授）と、湖西キャンパスで本研究の総括と今後の計画策定とを行った。

個人研究

多感覚表象形成メカニズムの進化・発達的分析

研究代表者・任期制講師　高橋　真
（比較認知科学）

ヒトは、視覚と聴覚、視覚と触覚、味覚と触覚など、複数のモダリティからの情報を統合して処理する。統合された結果、特定の感覚モダリティが別のモダリティの情報を同時に想起する現象は、クロスモーダル知覚（Cross-modal Perception）や感覚間統合と呼ばれる。

クロスモーダルや感覚間統合が成立する要因として、空間・時間的一致などの必然的な関連性に基づいた感覚間の相互作用が明らかにされているが、モダリティ間の関連の必然性が少ない結びつきにおいてもクロスモーダル知覚は生じる。感覚間の結びつきの必然性が少ないクロスモーダル知覚の現象として、共感覚症(synaesthesia)が知られている。共感覚症とは、特定の知覚領域と別の知覚領域が結びつく現象である。共感覚症は、数字に色が自動的に結びついて投射されるなど特殊な事例が知られているが、共感覚的な結びつきは一般の人にも見られる。例えば、「高い音」や「低い音」、「明るい音」や「暗い音」のような表現も文化に関わらず一般的に表れる共感覚的なクロスモーダル知覚といえる。ヒト成人やヒト乳幼児の研究から、クロスモーダル知覚が成立するメカニズムとして、神経結合の不要な結合の刈り込みが最も有力とされている。しかし、ヒトの場合、経験や生得的要因が混在しているため、この刈り込みがいかなる基準で行われているかを知るためには、ヒト以外の動物との比較研究が必要である。

ヒト以外の動物のクロスモーダル知覚は、チンパンジーやオランウータンなどの類人で視覚—触覚のクロスモーダル連合が成立することが示されている。さらに、近年、音の高低と明暗の共感覚的なクロスモーダル知覚がチンパンジーに生じることを、Ludwig, Adachi, & Matsuzawa (2011) が示している。

ネズミ目においては、Over & Mackintosh (1969) が、弁別課題の転移の成績からラットが音の強弱と光の強弱のクロスモーダル知覚をしている可能性を示している。また、高橋・谷内・藤田 (2010) は、選好滞在法を用いて、ラットが視覚的なノイズと聴覚的なノイズの共感覚的なクロスモーダル知覚をしている可能性を示している。ただし、音の明暗と光の明暗、音の高低と空間位置の高低に関わるクロスモーダル知覚はラットで検討されていない。

そこで、本研究では、金沢大学人間環境学研究科の谷内准教授の協力により、ラットがヒトやチンパンジーと同じように、同一次元内の相対的に異なる違いにおいてもクロスモーダル知覚が生じるかどうかを、高橋らの先行研究で用いられた選好滞在法で調べた。

実験1では、連続的に変化する視覚刺激と音刺激の変化の方向が一致する刺激と一致しない刺激の組み合わせに対する選好を調べた。実験装置としてY型の走路を用い、2つの走路の先端にそれぞれモニタを設置した。一方のモニタには音刺激と変化の方向が一致する刺激を、もう一方は一致しない刺激を提示した。明暗の刺激として、白から黒へと変化を繰り返す刺激と、50Hz～400Hz に連続的に変化するスウィープ音を用いた。空間位置の刺激として、上下運動を繰り返す円刺激と上述の音刺激を用いた。

ラットに5分間の自由探索をさせたときの一致刺激と不一致刺激の滞在時間を測定し、統計分析(分散分析)をかけた。その結果、明暗、空間位置ともに一致刺激と不一致刺激の滞在時間に差が見られなかった。このことは、ラットはヒトと同じようなクロスモーダル知覚をしていないという可能性を示す。しかし、長い間刺激を提示し続けていると変化の方向性の効果が消失し、運動の有無に一致性の認識に移行してしまう可能性がある。こうした効果を減らすためには、連続的に変化する刺激ではなく、離散的に変化する刺激の方が妥当かもしれない。

そこで、実験2では離散的に変化する視覚刺激と聴覚刺激を用いてラットのクロスモーダル知覚を検討した。実験2の手続きは実験1と同じであったが、用いた刺激が異なっていた。聴覚刺激は、400Hz の純音と1600Hz の純音を1秒ごとに交互に呈示した。視覚刺激は、空間刺激として、刺激窓の上部・下部に直径50px の円刺激を、明暗刺激はライトグレーとダークグレーを、1秒ごとに交互に呈示した。実験1と同様に音刺激と一致するモニタと一致しないモニタに対する滞在時間を測定し、分散分析をかけた結果、条件間に統計的に有意な差が見られなかった。ただし、空間刺激と明暗刺激に対して個別に統計分析(t検定)を行った結果、明暗刺激において一致刺激と不一致刺激の滞在時間に差のある傾向が見られた。これらの結果から、実験1と同様にラットがヒトと同じようなクロスモーダル知覚をしている証拠は得られなかった。

本研究からラットのクロスモーダル知覚の証拠を得られなかったが、滞在時間による計測ではクロスモーダル知覚による不一致の影響の効果を十分に検知できない可能性がある。また、用いた聴覚刺激の音量がラットにとって小さいなどの問題点を挙げることができる。こうした問題点を解決し、今後さらなる検討を行う。

海外学会参加報告・海外研究調査報告①

第11回ヨーロッパ宗教学会（EASR）に参加して

国際仏教研究 前研究代表者・教授　ロバート F. ローズ

８月23日から26日のあいだ、木越康准教授と国際仏教研究班嘱託研究員のマイケル・コンウェイ非常勤講師と共に、ストックホルム郊外の Södertörn 大学で、スウェーデン比較宗教研究学会（Swedish Association for Research in Comparative Religion）の主催で開催されたヨーロッパ宗教学会（European Association for the Study of Religion、EASR と略す）の第11回大会に参加し、研究発表を行う機会を得た。また学会後には、オランダのライデン大学を訪問し、ジョナサン・シルク（Jonathan Silk）教授からヨーロッパにおける仏教研究の動向や宗教事情について詳しい話を聞き、貴重な情報を収集することができた。以下、簡単に今回の訪問について報告する。

Ⅰ．EASR 学会について

EASR はヨーロッパ諸国で宗教を学問的に研究する研究者の交流を促進するために2001年に結成された学会である。また同年にはイギリスのケンブリッジ大学で第１回大会が開催され、それ以降、パリ、ノルウェーのベルゲン、スペインのサンタンダルなど、ヨーロッパ各地で年次大会が開かれている。今回も多くの研究者がヨーロッパのみならず、世界各地から集まり、４日間の学会期間中、100を超えるパネルに分かれて400以上もの研究発表が行われた。ちなみに、会場となった Södertörn 大学は近代的な総合大学で、宗教研究―特に現代ヨーロッパの宗教事情の研究やイスラムの研究―が盛んな大学である。

今年の学会テーマは "Ends and Beginnings"（「終焉と始まり」）という、やや謎めいていながらも、刺激的で興味深いものであった。学会のパネルで取り上げられた内容は多岐に渡り、キリスト教の終末論、古代ギリシャ・ローマの諸宗教や宗教儀礼に関する方法論的考察や事例報告など比較的「古典的」な研究領域・課題に焦点を当てたものから、現代ヨーロッパの宗教教育や東ヨーロッパにおける宗教復興運動、さらには宗教と脳科学など、様々な角度から宗教についての考察がなされた。特に興味深かったことは、「宗教とアラブの春」というホットなテーマを取り上げて注目を集めていたパネルも含めて、イスラムに関するパネルが八つも設けられていたことであった。これは、「ヨーロッパにおけるイスラムとイスラム教徒」というパネルに象徴されるように、ヨーロッパには北アフリカやアラブ諸国からの移民が多く暮らしているため、イスラムに関心が極めて高いことが、その背景にあるように思われる。また筆者が最終日に出席した現代的スピリチュアリティーのパネルでは、近年ヨーロッパ各地で復興し信者を着々と集めているドルーイド教（古代ケルト人の宗教）やウィッカ（イギリスから唯一世界に広がった宗教と評されるローマ時代以前の多神教の復興運動）などについての報告が行われ（ウィッカについての報告は、ウィッカの司祭［ウィッチ、つまり《魔女》］であり、心理学者であると称する女性によってなされた）、ヨーロッパの宗教事情の一面を垣間見た気がした。

周知の通り、ヨーロッパには宗教研究の長い伝統があり、本学の仏教研究の国際化を目指すうえで、ヨーロッパの宗教学者との交流を深めることは有益であると考えられる。そのため、EASR で近代真宗教学に関するパネルを行うことを、国際仏教研究班の活動の一環として認めていただき、上記の３名に加えて、ドイツのマールブルク大学のカティア・トリプレット（Katja Triplett）教授をコメンテーターとした４名よりなるパネルを結成し、今回の学会に望むこととなった。パネルは８月24日の午後（13：30～15：30）に開かれたが、そのテーマと発表題目は次の通りであった。

パネルテーマ：Understanding of History and Salvation in Japanese Pure Land Buddhism（日本浄土教における歴史と救済の理解）

パネリストと発表題目（発表順に記す）

(1)木越康（大谷大学准教授、真宗学専攻）：The Degeneration of Buddhism and the Development of Pure Land Thought（末法思想と浄土真宗）

(2)ロバート・F・ローズ（大谷大学教授、仏教学専攻）：A Modern Pure Land Interpretation of History: Soga Ryojin and *Shinran's View of Buddhist History*（近代浄土教の歴史解釈―曽我量深の『親鸞の仏教史観』について）

(3)マイケル・コンウェイ（大谷大学非常勤講師、真

宗学専攻）The Advent of a Savior on Earth: Soga Ryojin's Discovery of a New Beginning for Amida Buddha（地上の救主の降誕—曽我量深における阿弥陀仏の新しい始まりの発見）

(4)カティア・トリプレット（マールブルク大学教授、宗教学専攻）：上記の３発表へのレスポンス

これらの発表題目から分かるように、このパネルでは学会テーマの "Ends and Beginnings" を意識しつつ、近代真宗教学の時間論・歴史観について考察を試みた。その構成としては、まず木越准教授が、末法思想の流行と浄土教の発展について概説し、特に末法の時代に本願念仏の教が興隆すると主張した親鸞の基本的視点を紹介した。次に筆者は近代浄土教を代表する思想家である曽我量深の『親鸞の仏教史観』を取り上げ、曽我が近代の実証的仏教史学の方法論を批判することを通じて、真の仏教史は本願による「救済の歴史」であり、念仏の伝統に参入することによって浄土に往生し成仏を獲得する人々の歴史であると論じたことを紹介した。さらにコンウェイ講師は『無量寿経』には法蔵菩薩がすべての衆生が救済されない限り成仏しないと誓ったにもかかわらず、すでに成仏しているという時間的パラドックスを紹介し、そのパラドックスに含まれている解釈的余地によって曽我が、法蔵菩薩の永遠の修行を中心とした独創的な法蔵菩薩論を展開したことについて論じた。またトリプレット教授はコメントの中で、それぞれの発表者に問いを発し、それらの問いをきっかけとして、会場の聴講者も交えて突っ込んだ質疑応答が行われた。

この学会では私たちのパネル以外にも仏教をテーマとしてパネルが三つと日本・中国の諸宗教をテーマとしたパネルが二つ設定されていた。時間の都合上、それら全てに出席することはできなかったが、特に興味深かったのは８月24日の午前（9：00〜11：00）に行われた「仏教の救済論」(Buddhist Eschatologies) を主題としたパネルであった。このパネルでは近年のブルヤート（バイカル湖周辺のロシア領）の仏教事情を紹介した研究発表が二つ含まれていたが、このようなロシア領内の仏教の情報はあまり日本へは伝わっていないため、筆者にとっては新鮮なものであった。またトリプレット教授がチェアパーソンを勤めた「日本・中国の宗教Ⅰ」と題されたパネル（８月26日、9：00〜11：00）に、数年前、博士論文を執筆するために大谷大学で研究を行ったエリザベッタ・ポルク（Elizabetta Porcu）教授とウゴ・デッシ（Ugo Dessi）教授が参加されていたことを付け加えておきたい。ポルク教授の発表は日本の諸宗教が、現在どのようにアニメや漫画のキャラクターを布教活動に用いているかを紹介したものであり、デッシ教授の発表は日本仏教の諸宗派と国際化をテーマとしたものであった。最近欧米では、古典的仏教文献や過去の仏教の歴史などに加えて、今現在アジア諸国で生きている仏教についての関心が高まっており、ポルク・デッシ両教授の発表もそのような関心を反映したものであった。

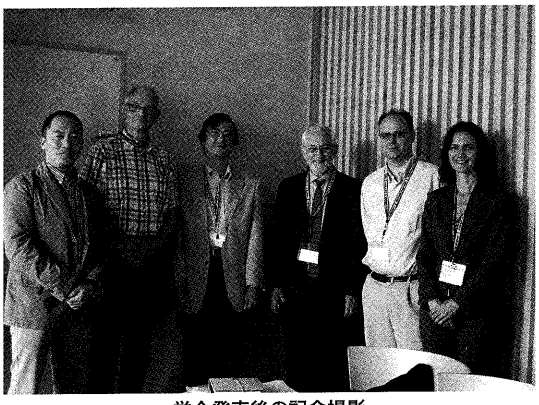
次回の学会はイギリス宗教研究学会（British Association for the Study of Religions）の主催のもと、リバプールのリバプール・ホープ大学（Liverpool Hope University）で、2013年の９月３日から６日の日程で開催されることが決定されている。大会テーマは「宗教・移住・変異」(Religion, Migration, Mutation) である。世界中から様々な宗教を持つ移民を受け入れてきたヨーロッパならではのテーマである。

Ⅱ．ライデン大学訪問

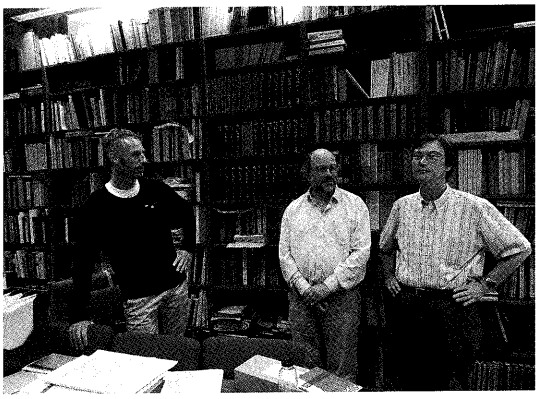
学会参加後、オランダのライデン大学を訪問し、インド仏教の著名な研究者であるジョナサン・シルク教授と情報交換を行う機会を得た。シルク教授はアメリカ人であるが、学生時代に京都に留学したとき仏教に関心を持ち、1994年にミシガン大学から仏教学の博士号を取得した。その後カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）など、アメリカのいくつかの大学で教鞭を取られたが、2008年にライデン大学に招聘され、インド仏教の講座を担当することとなった。著書には *Riven by Lust: Incest and Schism in Indian Buddhist Legend and Historiography* や *Managing Monks: Administrators and Administrative Roles in Indian Buddhist Monasticism* があり、そのほかにも長尾雅人博士の米寿記念論文集 *Wisdom, Compassion, and Understanding* を編集している。

現在シルク教授は仏教入門の授業を担当する以外に、オランダ科学研究機構（The Netherlands Organization for Scientific Research, NWO）に採択された「仏教と社会正義」(Buddhism and Social Justice) という研究プロジェクトを主催している。この５年間のプロジェクトはシルク教授を含む５人の研究員（その内３人は博士課程の在学生）で構成されており、それぞれがアジア諸国の仏教と経済・社会の諸問題（例えばインド仏教と奴隷制度やカースト問題、日本仏教と部落問題など）を分担し研究することを目的としている。最終的には国際学会を開き、その成果を出版する計画であるが、その一環として博士課程在籍者は、各自のテーマに沿って博士論文を執筆することが求められていることも、この研究プロジェクトの注目すべき特徴のひとつである。

このように、外部資金を基に研究プロジェクトを進めながら、その一環として将来の研究者を育てて行くというシステムは、今後の大学院教育のあり方に大きな示唆を与えてくれるものである。またライデン大学では1992年から仏教伝道協会の沼田仏教講座（Numata Chair in Buddhist Studies）が開設されているが、今年度は龍谷大学名誉教授の山田明爾先生が担当することとなっているという情報も得ることができた。今後も本学とライデン大学の交流が、より一層深まることを期待している。



学会発表後の記念撮影
左から木越准教授、A. ランデ（ルンド大学名誉教授）、筆者、マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授、EBS 編集長）、コンウェイ講師、トリプレット教授



シルク教授の研究室にて
左から Vincent Breugem（博士課程）、シルク教授、筆者

海外学会参加報告・海外研究調査報告②

第16回ヨーロッパ真宗学会大会 The 16th European Shin Conference（国際真宗学会ヨーロッパ支部大会および国際仏教文化協会ヨーロッパ真宗学会大会）に参加して

国際仏教研究（ドイツ・フランス班）研究員・准教授　藤枝　真

2012年８月31日から９月２日にドイツ・デュッセルドルフで開催された第16回ヨーロッパ真宗学会（The 16th European Shin Conference）に参加し研究発表を行った。デュッセルドルフのドイツ「恵光」日本文化センターを会場にしたこの学会は、国際真宗学会（International Association of Shin Buddhist Studies, IASBS）と国際仏教文化協会（International Association of Buddhist Culture, IABC）が共催するかたちで開かれ、ヨーロッパをはじめとする世界各国から50人を超す参加者があった。大谷大学からは報告者の他に、教育・心理学科の川村覚昭教授の参加もあった。

１．第16回ヨーロッパ真宗学会について

２年ごとに行われているこの学会は、国際真宗学会（IASBS）のヨーロッパ支部大会と国際仏教文化教会（IABC）の学術大会という二つの側面をもち、今大会は“The Importance of Sangha”（サンガの意義）が共通のテーマとして掲げられて、それぞれの組織の主旨に合わせた発表が行われた。全日程のうち、８月31日はIASBSの支部会として位置づけられており、ドイツ「恵

光」日本文化センターの青山隆夫師およびIASBS会長のケネス・タナカ氏の挨拶に続いて、各50分の発表時間（質疑応答10分を含む）で学術的な研究発表がなされた。

真宗学、仏教学、心理学など、様々な研究分野からの発表があるなかで、藤枝は生命倫理をめぐる宗教的言説の位置づけが変化していく様子を発表し、議論の多元的な性格を保つために、サンガが発言する重要性を強調した。

個々の発表者・題目は以下の通りである。

2012年8月31日(金)（European Branch Conference of the IASBS）

Tanaka, Kenneth: "Assessing Shinjin from an Indian Mahâyâna Buddhist Perspective: With a Focus on Adhimukti in Tathâgatagarbha Thought"（信心をインド大乘仏教の観点から評価すること：如来蔵思想におけるAdhimuktiを中心に）

Sato, Taira: "The Shin Buddhist Awakening of Faith, Encounter and Sangha"（真宗の深信、出会い、サンガ）

Mullen, Kenneth: "Mindfulness and the Nembutsu"（憶念と念仏）

Brazier, Caroline: "Grounded in Faith -Psychotherapy and Pure Land"（信心のもとに：心理療法と浄土）

Fujieda, Shin: "Sangha and its Participation in the Public Debate on the Issue of Brain Death / Organ Transplantation"（脳死・臓器移植問題に関する公的議論へのサンガの寄与）

Arai, Toshikazu: "Dilemmas of the Sangha"（サンガのディレンマ）

続いて大会2日目の9月1日は、IABCの主催であり、各30分の発表時間（質疑応答10分を含む）で発表が行われた。IABCが開いたこの日の発表は、禿定心「ヨーロッパの念仏者コミュニティを形成することの重要性」や小野真「西谷啓治のサンガ論」など、前日と同様の学術的研究発表も含まれているが、dharma talkと呼ばれる法話・感話が大半を占めていた。個々の発表者・題目は以下の通りである。

2012年9月1日(土)（European Shin Conference of the IABC）

Kamuro, Joshin: "The Importance of Establishing a Community of Nembutsu Followers in Europe"

Cirlea, Adrian: "The Meaning of the Three Refuges in Jodo Shinshu"

Kashiwahara, Nobuyuki: "Sangha: Why that?"

Ono, Makoto: "Keiji Nishitani's Sangha Theory"

Martens, Fons: "What specific characteristics can make a sangha "sangha"?"

Johnson, Diane: "Sangha, Dharma Friends and Social Media"

Dusza, Marta: "The Sangha's influence on my Life"

Bhutia, Sonam: "The Sangha in Nepal"

Bhutia, Chengwang: "About Sangha"

Cumberlege, Marcus: "I can't, we can!"-A pluralistic approach to spiritual life in the framework of Shin Buddhism.

Bot, Frits: "Rennyo Shonin on Sangha - what can we learn from him?"

（なお、3日目は浄土真宗本願寺派の大谷光淳新門による「帰敬式」が行われた。そして次回2014年サザンプトンでの開催を確認し、大会を締めくくった。）

口頭発表の様子（藤枝）

2．ドイツにおける研究者との交流・調査について

大会の前後に、宗教学・神学・仏教学研究者と交流し、また併せてドイツ国立図書館で情報収集を行った。大会前には、フランクフルトでマルティン・レップ氏（元龍谷大学教授）と、マールブルクでシュテファン・イェーガー氏（マールブルク大学神学博士）と会談し、ドイツでの宗教研究の現状や、生命倫理を巡る今日的問題について教示を受けた。また、大会後には再びマールブルクに赴き、ゲルハルト・マルセル・マルティン（マールブルク大学名誉教授）と会談し、これまでの本学との研究の歩みやこれからの共同研究のあり方について意見を交換した。

G. M. Martin 名誉教授と Marburg にて

海外学会参加報告・海外研究調査報告③

第29回国際堆積学会（オーストリー国、シュラードミング市）に参加して

一般研究（鈴木班）研究代表者・准教授　鈴木 寿志
研究協力員　三上 禎次

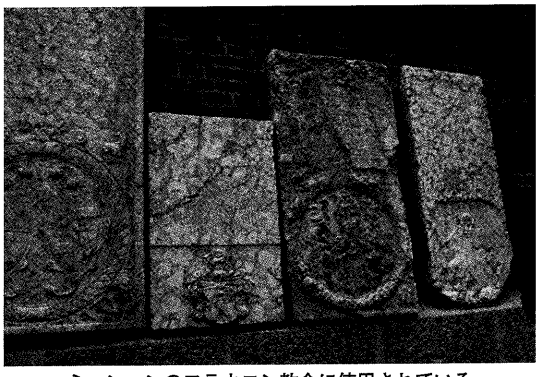
2012年９月７日～17日に第29回国際堆積学会（略称IAS: International Association of Sedimentologists）がオーストリー国シュラードミング市で行われた。世界中の堆積学研究者が集う大きな学術大会で、通常の学術講演とポスター発表に加え、アルプス山脈の野外巡検と特定課題の勉強会であるショートコースも学会期間中に行われた。大谷大学真宗総合研究所の一般研究（鈴木班）から、研究代表者の鈴木寿志と研究協力員の三上禎次が、野外巡検も含めて参加した。さらに学会期間の前には、研究課題である「ジュラ紀放散虫群集の数値年代」の現地調査をドイツ人研究協力者のVolker Diersche博士とともに行った。

１．ミュンヘン、ザルツブルグ、ウンケンでの調査（９月３日～６日）

９月３日の朝に関西国際空港から出国し、ヘルシンキを経由してドイツ国のミュンヘン国際空港に到着した。９月４日の午前中はミュンヘン市内の、また午後にはザルツブルグへ移動し、建造物や教会に使われている石材を調べた。その結果、赤色の石材がジュラ紀古世のアドネット石灰岩であること、また淡灰色を帯びて礫を多く含む石材がアルプス山脈の北縁にみられる氷河性礫岩であることが分かった。９月５日には研究協力者のVolker Diersche博士の案内で、ザルツブルグ州ウンケン（Unken）近くのグシャイトグラーベン（Gscheidgraben）にて放散虫岩に挟まれる凝灰岩の現地調査を行った。凝灰岩中の鉱物の放射年代を測定することで、放散虫岩の年代を「今から何年前」という数字で示すことが可能になると期待される。９月６日はザルツブルグから学会会場のあるシュラードミングへ列車で移動した。

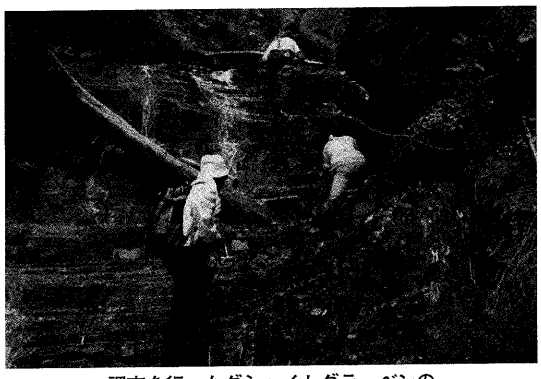
２．学会前巡検およびアイスブレーカー・パーティー（９月７日～10日）

９月７日から10日まで、鈴木と三上はともに「オーストリーアルプスの大陸縁および堆積盆地に記録された三畳紀末大事件。三畳系・ジュラ系およびノール階・レート階の国際境界模式層序・位置」（"End-Triassic crisis events recorded in platform and basin of the Austrian Alps. The Triassic/Jurassic and Norian/Rhaetian GSSPs."）の野外巡検に参加した。巡検初日（９月７日）は、ライスリングコーゲル（Leislingkogel）のノール階ハルシュタット石灰岩、シュタインベルクコーゲル（Steinbergkogel）のノール階・レート階の国際模式境界候補地を訪れた。夜７時ころにはゴーザウのホテルでの宿泊となった。巡検２日目（９月８日）はゴーザウ湖北方の三畳紀末の珊瑚礁石灰岩を観察し、その後ザルツブルグ南方のテンネンゲビルゲ（Tennengebrirge）の登山道やルエグ峠（Pass Lueg）の道路沿いの露頭、アドネットの三畳紀末の石



ミュンヘンのフラウエン教会に使用されている
アンモナイトを含むアドネット石灰岩の石板彫刻

ザルツブルグの建造物に使用されている礫岩



調査を行ったグシャイトグラーベンの
凝灰岩薄層を挟む放散虫岩層

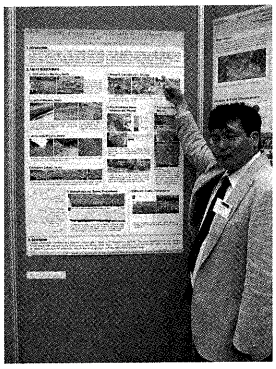
灰岩採石場を見学し、珊瑚礁内部から周辺の様々な堆積場を示す石灰岩を観察した。この日はザルツブルグ南西にあるローファー（Lofer）のホテルに宿泊した。巡検３日目（９月９日）は、観光登山の山でもあるシュタインプラッテ（Steinplatte）の三畳紀公園（Triassic Park）に登った。三畳紀末レート期の珊瑚礁石灰岩が広範囲に分布し、下山途中には三畳紀とジュラ紀の境界（ただしエタンジュ期はじめの地層を欠く）をまたぎ、ジュラ紀古世の赤色石灰岩の露頭をまわった。天候に恵まれとても心地よい登山であった。その後はさらに西方のチロル地方へと移動し、アイベルグ採石場（Steinbruch Eiberg）にて三畳系とジュラ系の境界露頭を見学した（ここでは境界は断層になっている）。この日はオーストリーから国境を超えてドイツのファル（Fall）のホテルに宿泊した。巡検４日目（９月10日）は、インスブルックの北東にあるクーヨッホ（Kuhjoch）という山に麓から約２時間かけて登り、ジュラ系基底の国際模式境界（三畳系とジュラ系の境界が世界で最も典型的に露出する場所として認定された模式地）を観察した。ここで巡検の観察地点は終わりとなり、約４時間かけてシュラードミングへ戻った。この日の夜にはシュラードミング会議場で開会式とアイスブレーカー・パーティーが行われた。

シュタインプラッテの三畳紀末珊瑚化石

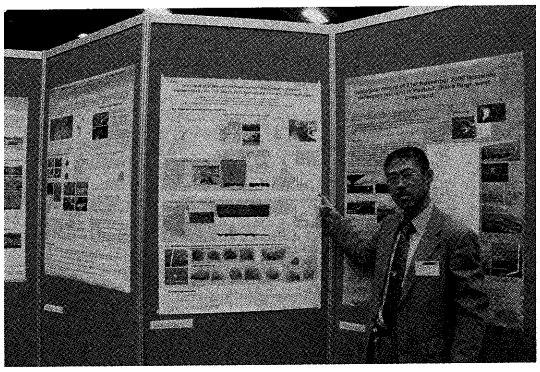
３．第29回国際堆積学会での発表（９月11日～13日）

９月11日から13日には、シュラードミング会議場とスポーツホテル・ロイヤーにて７会場が設置され、堆積学の主題ごとに講演およびポスター発表が行われた。主題は14テーマ、37セッションにわたり、堆積学の分野ごとに世界トップの専門研究者が集い、活発に意見交換された。研究代表者の鈴木はテーマ８「災害・事件・気候の記録」のセッション２「歴史・地質記録における津波堆積物」の分科会において京都大学の志岐常正名誉教授の講演“Features, objects and ways of tsunamiite research, with some special references to water movement and sediments of the ３.11. 2011 Northeast Japan earthquake tsunami”を代理で行った（９月11日）。またポスターにて“Grain Size analysis and mollusk fauna of the tsunami deposits transported by the 11th March 2011”を発表した（９月11日）。鈴木はさらにテーマ10「山脈の堆積岩」のセッション１「海から山へと取り込まれたチャート質堆積岩」の分科会において“Greenish-white reduction microspheres in Triassic red bedded cherts of Sakahogi town on the River Kiso, central Japan” を口頭で発表した（９月13日）。研究協力員の三上も同様に、テーマ８セッション２にて津波堆積物のポスター発 表“Diversity of the tsunami deposits and their facies formed by the 2011 Tohoku Earthquake Tsunami”を（９月11日）、またテーマ10セッション１にて放散虫岩の弱変成過程についての講演“Relationship among the conodont colour alteration index, quartz crystallinity index and mean diameter of quartz grains in bedded cherts in Tamba terrane SW Japan and its validity”を英語で発表した（９月13日）。いずれも国際的な視野で様々な国の参加者と建設的な議論を活発に行うことができた。

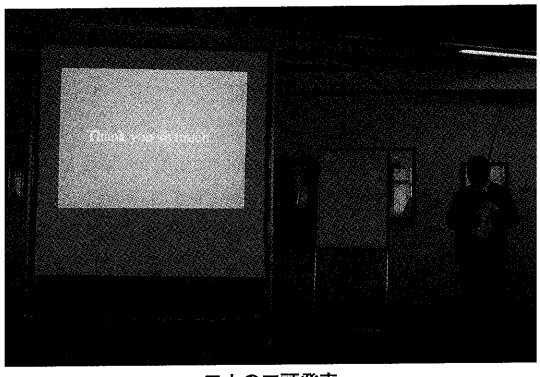
クーヨッホのジュラ系基底国際模式境界（GSSP）



三上のポスター発表



鈴木のポスター発表



三上の口頭発表

鈴木の口頭発表

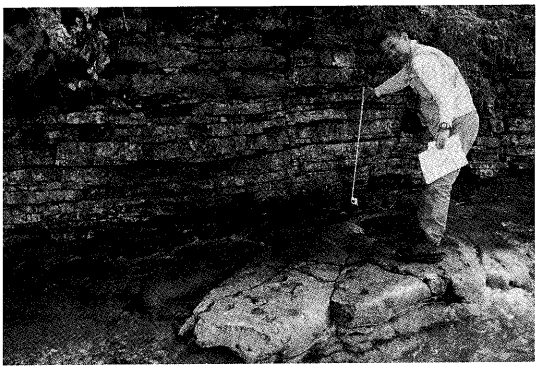
4．学会後巡検（9月14日～17日：鈴木のみ参加）

9月14日から17日まで、鈴木は「テチス海北西部のジュラ紀活動縁辺域における深海堆積盆地と石灰岩台地の形成（オーストリー、ドイツ）」（"Jurassic active continental margin deep-water basin and carbonate platform formation in the north-western Tethyan realm (Austria, Germany)."）の野外巡検に引率者の一人として参加した。巡検初日（9月14日）は、フルダーグラーベン（Fludergraben）周辺の放散虫岩とオリストストローム堆積岩を観察した。巡検2日目（9月15日）は、シュタインベルグ（Steinberg）の三畳系上部統ハルシュタット石灰岩を観察した後、ローザー山頂上へ向かった。残念ながら一時的な寒冷化のせいで、山頂は雪に覆われ深い霧がかかっていたため、あまり多くを観察することはできなかった。その後、ヘハーシュタイン（Höherstein）とヴォルフガング湖のジュラ系最上部石灰岩の堆積相を観察した。巡検3日目（9月16日）は、ガイサウに向かう街道沿いにて三畳系ノール階の苦灰岩相、メルトゥルバッハ（Mörtlbach）のジュラ系中・上部放散虫岩、アドネットのジュラ系下部統の赤色石灰岩、ランマー谷（Lammer Tal）のジュラ系角礫岩層を観察した。巡検4日目（9月17日）はジュラ系上部統のタオグルボーデン層（Tauglbodenschichten）を観察し、堆積速度の変化について特に議論された。ここで飛行機の搭乗時間の関係から、中国人とロシア人の一部の参加者が一足先に列車にて帰路についた。それまでの巡検で日々歩きずくめだった一行は、ようやくこの日の昼にホッホライト・アルム（Hochreithalm）の山小屋レストランにて地元の料理をゆっくりと堪能することができた（それまでの昼食は弁当主体であった）。その後、バート・ドュルンベルク（Bad Dürrnberg）にて上部ノール階のハルシュタット石灰岩とその石材を用いた教会を訪れ、シュラードミングへ戻った。

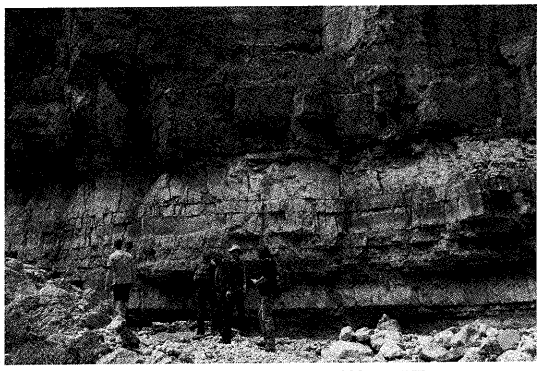
5．学会後巡検（9月15日～17日：三上のみ参加）

9月15日から17日まで、三上は「イタリア、南アルプスのドロミテ山地にみられるペルム系・三畳系境界と下部三畳系」（"Permian-Triassic Boundary and Lower Triassic in the Dolomites, Southern Alps (Italy)"）の巡検に参加した。巡検初日（9月15日）はまず、シュラードミングを大型バスで出発し、インスブルックを経て、イタリア北部の南チロル地方を目指した。そして、ボルツァーノ（Bolzano）近郊、ピューフェルス（Pufels）という小さな町のペルム系・三畳系境界（すなわち、古

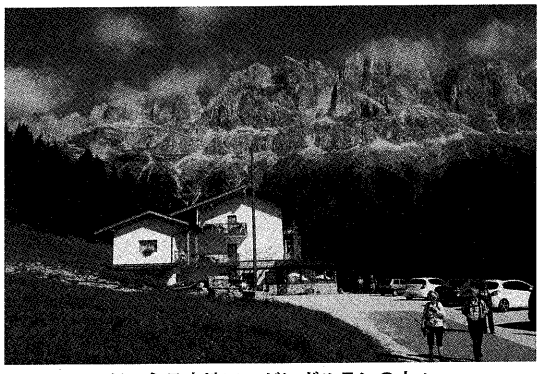
ランマー谷に露出するジュラ系中・上部角礫岩



タオグルボーデン層基底の放散虫岩



サイスのペルム系・三畳系境界露頭



ドロミテ山地ローゼンガルテンの山々

生界・中生界境界）を見学した。この日はピューフェルス（Pufels）のホテルに宿泊した。巡検２日目（９月16日）はサイス（Seis）地域で約１時間の登山と沢登りを行い、大きな岩壁に露出するペルム系・三畳系境界を見学した。またその後は、2009年に世界遺産に登録された三畳系石灰岩からなるドロミテ山地のローゼンガルテン（Rosengarten）を遠望し、世界自然遺産の雄大さを感じた。この日はボルツァーノ南東のトラミン（Tramin）に宿泊した。巡検３日目（９月17日）は宿泊施設から徒歩で15分程度離れた沢沿いの露頭で、ペルム系・三畳系境界周辺の浅海層を観察した。巡検の観察地点はここまでで、その後バスで約５時間かけてシュラードミングまで戻った。

６．おわりに

今回の国際堆積学会では，国際的な視点での議論とこれまで知りえなかった知識を得ることができた。野外巡検に参加することによって、普段日本では見られない地質を目の当たりにし、アルプスの大自然に触れることができた。ウンケンでの現地調査では、真宗総合研究所の研究課題となっている凝灰岩層を直接露頭で見ることができ、さらなる新見地を導くヒントを得ることができた。ミュンヘンやザルツブルグではアルプス山脈の存在が地域文化や人々の営みに大きな影響を与えていることを強く感じ、今後の日本での国際文化交流や宗教的な比較教材資源として活用できるものと確信した。

海外学会参加報告・海外研究調査報告④

第14回東南アジア考古学者ヨーロッパ協会国際会議（EurASEAA）への参加、並びにチェスター・ビーティー図書館が所蔵するパーリ語写本の調査について

西蔵文献研究　嘱託研究員　清水 洋平

2012年９月15日(土)から９月21日(金)まで、アイルランド共和国の首都ダブリンに赴いた。目的は、①チェスター・ビーティー図書館（Chester Beatty Library）とダブリン城で開催される東南アジアの写本研究を含む国際会議（The 14th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists (EurASEAA)）に参加すること、②ダブリンに所在するチェスター・ビーティー図書館（世界各地から集められた写本を中心とする2万点以上の美術品を収蔵することで有名）に所蔵されているパーリ語写本のうち、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本（〈大谷貝葉〉と略称）と関連の深い写本について調査を実施することであった。

Ⅰ．EurASEAA国際会議：

会議は９月18日(火)から開催され、約320名の発表者が20のパネルに分かれておこなわれた。筆者が参加したパネル「東南アジアの写本と写本文化における新しい研究：ヘンリー・ギンズバーグ先生記念パネル」（'New research in Southeast Asian manuscripts & manuscript cultures: papers in honour of Henry Ginsburg'）では、次のようなタイトルでの発表があり、活発な討議がなされた。

○'The mythology of Ganesha and Vishnu in the Thai elephant manuscripts'
Hiram Woodward (Walters Art Museum)

○'Narrative scenes on Kammavaca manuscripts in Burma'
Sinéad Ward (Chester Beatty Library)

○'The emerging manuscript heritage of Somdej Suk Kaithoeun'
Phibul Choompolpaisal (University College Cork)

○'Drawn to an 'extremely loathsome' place: the Buddha and the power of the northern Thai landscape'
Angela Chiu (University of London)

○'Heavenly rewards and their material reminders'
Rebecca Hall (Walters Art Museum)

○'The representation of the female in Thai manuscript painting'
Jana Igunma (British Library)

○'To compensate bad karma, to help those who suffer: a Mon manuscript and 'narratives' on Jujaka amulets'
Arthid Sheravanichkul (Chulalongkorn University)

○'A comparative study of the differences between the Folding Books kept in Kakuozan Nittaiji and the New York Public Library'
Kazuko Tanabe (Eastern Institute)

○'A Burmese cosmology manuscript in the British Museum'
Alexandra Green (British Museum)

○'The Pakṣi-Pakaraṇam: problems in the study of manuscripts and decorative art in Thailand'
Justin McDaniel (University of Pennsylvania)

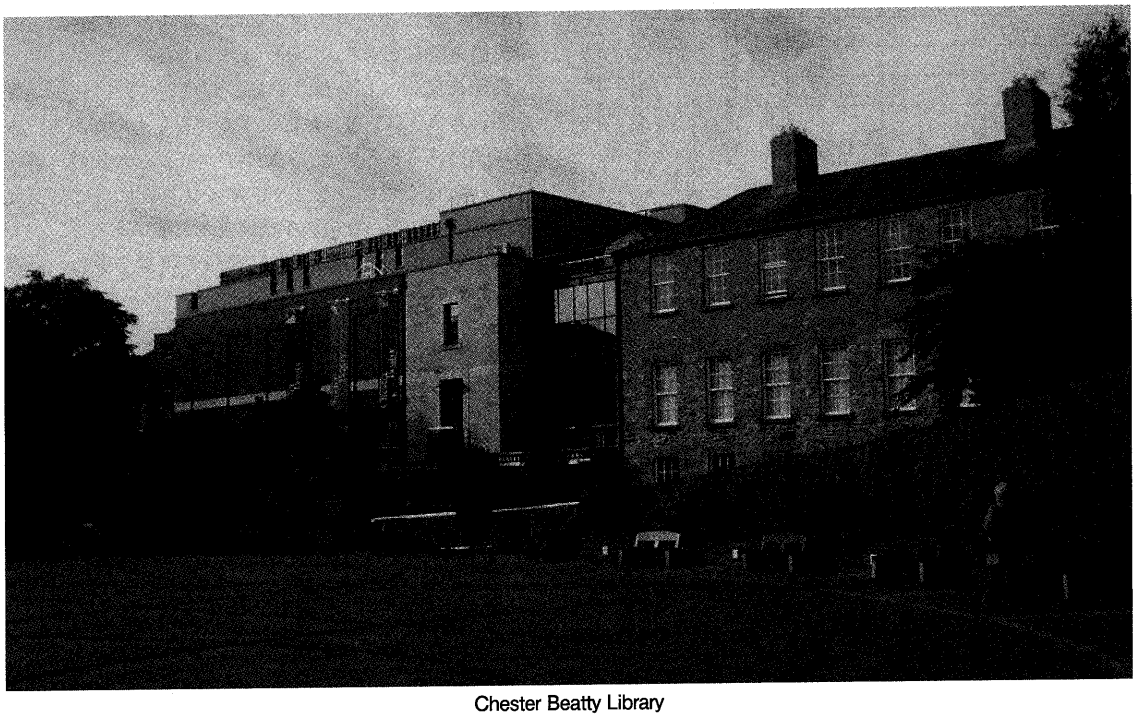
初めてのEurASEAAの国際会議への参加であったが、当国際会議で上記の発表を聞けたことは、世界の東南アジア写本研究の動向及び現状の一端を知る上で大変意義あることであった。どの発表も興味深いものばかりであり、今後、タイ王室寄贈を機縁とした大谷貝葉中の稀覯文献の抽出作業を進めていく上でも大いに参考になるものであった。また、上記の発表をなされた研究者に対して、当国際会議のレセプションの場などを通じて、大谷貝葉や大谷貝葉に関する真宗総合研究所の取り組みなどを伝えることができたことも一つの成果であったと考える。今後は、このような国際会議の場を積極的に活用し、世界の研究者との懇談、打ち合わせをおこない、大谷貝葉に関する研究成果を世界に発信していく努力を続けていきたい。

Ⅱ．チェスター・ビーティー図書館：

国際会議が始まる前日の９月17日(月)、同図書館において、パーリ語写本の調査をおこなった。この調査は、大谷貝葉の中で昨年度に稀覯文献と判明し専門家が注目している文献*Mahābuddhaguṇanvāta aṭṭhakathā*（請求記号番号：XXXIX-5, 6）について、同図書館に所蔵されている関連写本の調査をおこなうものである。調査が実現した背景には、タイの写本研究家としても知られるペンシルバニア大学のDr. Justin McDaniel准教授から、

同図書館所蔵の写本調査の許可を得たので共同で研究調査を実施してもよいとの提案があったためである。調査には、同図書館のLaura Muldowney研究員の協力のもと、Justin McDaniel博士の他、EurASEAAの国際会議での発表のためにダブリンへ来られていた東南アジアの仏典写本研究でも有名な田邉和子博士（中村元東方研究所顧問・研究員）にも加わって頂いた。

活動としては、大谷貝葉の中の稀覯文献*Mahābuddhaguṇanvāta aṭṭhakathā*と関連が深いと考えられる5套の写本（Thai MS. 1335, 1341, 1343, 1345, 1346）を、田邉和子博士とJustin McDaniel博士に多くの助言を求めながら特定し、それらを写真撮影することができた。今回、貴重な関連写本資料をデジタル画像として入手することができたことは大きな成果であった。今後、入手したデジタル画像を検討し、それらの文献が、大谷貝葉とタイトルは同一ではないが内容が一致するという可能性の有無など（クメール文字写本ではタイトルの一部が省略される場合が時折見られる）を確認し、それらの情報を本学図書館並びにチェスター・ビーティー図書館へ提供していきたい。



Chester Beatty Library

国内研究調査報告

国立国会図書館関西館・菊陽町図書館（熊本県）の研究調査について

一般研究（三浦班）研究代表者・講師　三浦 誉史加

平成24年度は、明治から昭和期にかけて日本の少年少女雑誌に掲載されたシェイクスピア作品翻案物の検証を研究テーマとしている。その資料収集を目的とし、9月13日・14日にかけて国立国会図書館関西館・菊陽町図書館（熊本県）を来訪した。中でも研究テーマに沿う資料が豊富であった菊陽町図書館を中心に報告したい。同図書館は明治・大正・昭和期に発行された少女雑誌のコレクションを有し、その蔵書数は3600冊を超える。現時点ではデータベースは非公開であるため、同図書館少女雑誌担当村崎修三氏より多大なご尽力を賜りながら特定作業を行った結果、シェイクスピア作品は32件見つかった。扱われた作品・発行時期の内訳は以下の通りである。

作品名	大正期	昭和期（20年まで）	昭和期（35年まで）
『ヴェニスの商人』	0件	0件	3件
『オセロ』	0件	0件	2件
『十二夜』	0件	0件	1件
『テンペスト』	0件	0件	1件
『夏の夜の夢』	0件	0件	4件
『ハムレット』	1件	1件	7件
『マクベス』	0件	0件	1件
『リア王』	0件	0件	7件（4件は続き物）
『ロミオとジュリエット』	0件	0件	4件

同図書館コレクションを見る限りでは、成人向け雑誌において明治期にいち早く日本語訳が現れ、他の作品に比べ著しく登場回数の多い『ハムレット』は、少女雑誌になじみ易いと思われた『ロミオとジュリエット』『夏の夜の夢』よりも件数が多い。

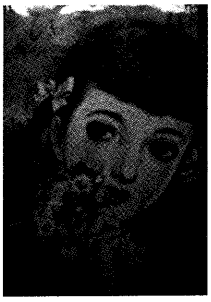
原作では女性嫌悪症が色濃く現れる『ハムレット』は、少女雑誌では少女を軸として展開する。『少女サロン』昭和26年6月号に登場する『ハムレット』（横沢千秋・詩）では、「オフェリア姫を死なせたは / わたしの罪だ。さァ討て！」（18頁）と喜んでオフェリアの兄に殺される。また、少女雑誌が提示する少女像に付与されたコードは、時に周囲の登場人物達をも取り込む。『小令女』第一巻（大正15年5月号）で櫻木暮路が翻案する『ハムレット』では、狂気の「オフィリヤ」にクローディアス王達が出会う直前の場面は次のように描かれる。

> やがて小川のほとりまで来ると王は軽く會釋をして、
> 『おゝ此處は又一段と氣が晴れ晴れする。さあ皆快く踊らうではなか。』
> と仰言ます。一同が輪になつて美しい歌聲に手振りも軽く舞ひ狂ふ姿は、春の野邊に描き出された蜃氣楼の様に綺麗に見えました。恰度一同が踊りに酔ひしれてゐる頃、それは果て知れない海の底からでも悲しみを訴へる様な物悲しい歌聲が森の彼方から聞えて参りました。
> 『悲しげに歌ふのは誰ぢや。』
> と云ふ王の言葉に皆は踊りを止めて耳をそば立てました。（44頁）

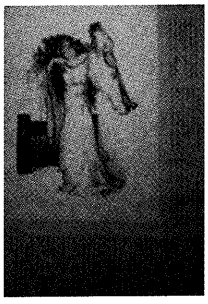
イギリス・ロマン主義の先駆者ウィリアム・ブレイクが描いた『夏の夜の夢』にて野で踊り狂う妖精達を思わせる幻想的な描写は、直後に登場する狂乱のオフィリヤのそれに通じ、少女を管理する側とされる側との境界線を曖昧にする。

同図書館のコレクションは、翻案物における少女像を探る為の資料を豊富に提供する良質なものである。少年雑誌に見られる少年/少女のイメージとの比較、翻案作品から見る時代性など、少年少女雑誌における英文学の位置づけ等、今後様々な検証が可能であろう。

同図書館資料を土台に更に資料の特定を進め、考察を深めていきたい。



『ひまわり』（ひまわり社）
昭和25年4・5月号表紙
菊陽町図書館所蔵



川口繁の文による
『ハムレット』（左誌掲載）

共同研究及び公開研究会報告

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基く共同研究、及び公開研究会開催について

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授　松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定も３年目に入った。本年度も双方の研究者が相互に訪問し、共同研究を進め交流を深めることができた。

本学からは、桂華淳祥教授と松川節教授が、７月30日～８月２日の日程で中国社会科学院を訪問し、共同研究を行った。

共同研究の一環としての学術報告会は、31日14時30分より歴史研究所1246室で開催され。桂華教授は「石刻史料から見た金代佛教と帝室」、松川教授は「パスパ文字モンゴル文ウサギの年聖旨の断片について」と題して報告した。

散会後は、劉栄軍中国社会科学院歴史研究所党委員会書記と、昨年本学を訪問された楼勁科研処処長の主催で、懇親会が行われた。会席したのは、過去に本学を訪問された先生方と、後述する本年10月に訪問された先生方で、相互の親睦を深めた。

今回の日程の中で、桂華教授は烏雲高娃副研究員の案内による郊外の史跡巡りを計画していたが、断続的な豪雨で道路が寸断されており危険を伴うことから断念し、北京市内にある首都博物館を見学した。また、松川教授は、中央民族大学蒙古語言文学院を訪問し、パスパ文字モンゴル文資料について意見交換を行い、さらに北京訪問中のポーランドやモンゴル国の研究者とも合流し、学術情報を交換した。

一方、中国社会研究院歴史研究所からは、９月24日～10月１日の日程で、林存陽研究員・陳麗萍助理研究員・烏雲高娃副研究員の３名を招聘し、共同研究を行った。

公開研究会は９月25日㈫午後４時から、響流館３階のマルチメディア演習室で行われた。林存陽先生が「清代学者の師友観」、陳麗萍先生が「敦煌石窟壁画中の婚姻資料―弥勒経変を中心に」、烏雲高娃先生が「洪武本『華夷訳語』の漢字音訳の規律」と題して、それぞれ発表された。先生方の最新の研究成果を踏まえた内容であり、参加者一同、興味深く拝聴した。

研究会終了後は、会場を学内ビッグバレーに移して懇談会が開催された。時間の関係もあり研究会の際に十分に質疑応答する時間がなかったため、引き続き意見交換が行われ、充実した一時であった。

また、28日夜は真宗総合研究所より浅見直一郎所長・釆睪晃主事臨席のもと、学外にて歓迎会が開催された。桂華教授・松川教授・松浦の他、若手研究者も数名参加し、和やかな雰囲気のもと、親睦を深めることができた。

先生方は、本学図書館に於いて史料蒐集などに積極的に取り組まれたほか、京都大学や龍谷大学を訪れ資料調査や研究者間の交流につとめられるなど、精力的に活動された。また、多忙な研究活動の合間には、清水寺を訪れられたり、買い物をされたり、しばしの余暇を楽しまれた。

本来ご帰国予定だった９月30日は、台風のため飛行機が欠航し、急遽、一泊延長するというハプニングもあったが、翌10月１日朝に帰国の途に就かれた。

本年度も大変充実した学術交流を行うことができた。来年度以降は、こうした共同研究の積み重ねを、まとまった形での研究成果として出すことを目指して進めていく所存である。

学術報告会 於 中国社会科学院歴史研究所

公開講演会報告

第３回公開講演会
講題：言葉の向こうに開ける仏教の原風景
—経文に見える「浄土」の意味

講師：辛嶋静志（創価大学国際仏教学高等研究所長・教授）

国際仏教研究　研究補助員　亀崎 真量

10月11日㈭16時20分より大谷大学響流館３階マルチメディア演習室において、創価大学国際仏教学高等研究所教授（所長）の辛嶋静志先生を講師としてお迎えし、「言葉の向こうに開ける仏教の原風景—経文に見える「浄土」の意味」という講題のもと、真宗総合研究所国際仏教研究班の第３回公開講演会が開催された。

今回は「浄土」に関する日本語での講演ということもあり、今年度最多の50名近い聴講者が集まった。この講演は、般若経類を中心に展開される浄仏国土思想と初期〈無量寿経〉との関係性や、漢訳された『無量寿経』の成立状況などから「浄土」の意味の変遷を考察することを通して、文献学の視点から「浄土」の“原風景”を明らかにし、近現代の浄土理解にも一石を投じようとするものであった。

辛嶋教授の論旨は以下の二点に絞られる。一つは、〈無量寿経〉の成立と浄仏国土思想の成立は没交渉であって、阿弥陀仏国を浄仏国土思想と結びつけて考えるようになったのは時代がかなり下がってからであるということであり、もう一つは、〈無量寿経〉が漢訳されたとき、「仏国土の美質・配置の極致」を意味する原語が「荘厳仏国清浄之行」などと“誤訳”されることによって、「浄土」が“国土を浄める（行）”という意味と結びつくに到ったということである。特に後者について辛嶋教授は、『無量寿経』の訳者が“ファンタジーに富んだ訳”を行った支謙の影響を受けるとともに、その念頭にすでに浄仏国土思想があったことから起こった“誤訳”であろうと指摘している。

これらのことから、阿弥陀仏国は本来は浄仏国土思想とは関係が無いと断った上で、「今日、極楽浄土を心の中にあるように考えたり、現世にあるかのように解釈する例が見られますが、これらは、特に『維摩経』「若菩薩欲得浄土、当浄其心、隨其心浄、則仏土浄」の“浄仏国土”（土を浄める）思想と結びついた解釈です。“浄仏国土”思想で、〈無量寿経〉の西方にある「極楽」を解釈するのは、木に竹を接ぐ解釈です」と結論づけられた。

原語の側面から、浄土がいわゆる自性唯心的に捉えられるものではないということを確かめている点において、辛嶋教授の講演は有意義なものであった。一方で、今回は特に経文上の「浄土」の語意のみに焦点が絞られたため、総合的見地からの考察という点で議論すべき課題が残り、質疑応答では活発な意見交換が行われた。この点については、辛嶋教授自身が「経文と親鸞聖人の著作にもどって考察しなければならない」と述べているため、今後の研究の進展と議論の展開が期待される。

公開講演会 於 マルチメディア演習室

真宗総合研究所彙報　2012. 5. 1～2012. 10. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇6月6日㈬　16時20分～（博綜館5階第4会議室）

1．2011（平成23）年度「決算」（案）について
2．2012（平成24）年度「一般研究」研究組織の一部変更について
　(1)科学研究費助成事業採択にともなう一般研究の研究組織の変更
　(2)すでに採択された一般研究の科学研究費助成事業採択にともなう共同研究への変更
　(3)科学研究費助成事業採択にともなう特別研究員の委嘱
3．2012（平成24）年度「予算」（案）について
4．特別研究員の受け入れについて
5．その他

○2012年度研究補助員（RA）辞令交付並びに雇用契約の締結に伴う、事務説明会

◇6月19日㈫　12時20分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

1．研究補助員（RA）辞令交付
2．研究補助員（RA）雇用契約の締結について
3．研究補助業務に関する事務説明
4．その他

「建学の精神」教育推進研究

2012年前期

《全体研究会》

第1回研究会

◇2012年4月19日㈭　16：20～17：50

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第1回「建学の精神」推進教育研究研究会
議題：本年度の活動について

第2回研究会

◇2012年5月17日㈭　16：20～17：50

場所：響流館4階　会議室
内容：第2回「建学の精神」推進教育研究研究会
議題：真宗大学東京移転開校の背景
講師：西本祐攝氏（大谷大学講師）

第3回研究会

◇2012年6月21日㈭　16：20～17：50

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第3回「建学の精神」推進教育研究研究会
議題：「真宗大学東京移転開校の願い」
講師：西本祐攝氏（大谷大学講師）

第4回研究会

◇2012年7月18日㈬　18：30～20：00

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：第4回「建学の精神」推進教育研究研究会
議題：清沢満之と「宗教」
講師：西本祐攝氏（大谷大学講師）

第5回研究会

◇2012年10月3日㈬　15：00～17：00

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
内容：公開研究会
議題：明治期の宗教教育における国家と学問と建学の精神
講師：高橋陽一氏（武蔵野美術大学教授）

国際仏教研究

〈英米班〉

◇ヨーロッパ宗教学会（EASR）大谷大学パネル発表に向けての研究会

①2012年4月5日　13：00～14：30
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
②2012年5月24日　17：00～18：30
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
③2012年7月25日　16：20～18：00
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム

◇「大谷大学樹立の精神」翻訳研究会

①2012年5月31日　14：30～16：00
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
②2012年10月8日　18：00～20：00
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム

《公開講演会》

①2012年６月25日　16：20～17：50

講師：阿満道尋氏（University of Alaska, Anchorage）

講題：「第二次大戦前の北アメリカにおける日本仏教の近代的発展」

場所：響流館３階　マルチメディア演習室

②2012年７月２日　16：20～17：50

講師：Mikael Bauer 氏（University of Leeds）

講題：「Monastic Lineages and Ritual Participation: A Proposed Revision of Kuroda Toshio's Kenmitsu Taisei Model.（法脈と法会出仕：黒田俊雄の顕密体制モデルの一つの修正案）」

場所：響流館３階　マルチメディア演習室

③2012年10月11日　16：20～17：50

講師：辛嶋静志氏（創価大学国際仏教学高等研究所教授・所長）

講題：「言葉の向こうに開ける仏教の原風景―経文に見える「浄土」の意味―」

場所：響流館３階　マルチメディア演習室

〈ドイツ・フランス班〉

◇フランス国立高等研究院（EPHE）において2010年に開催されたシンポジウム"National Identities and Religion:A French-Japanese Comparative Approach"での口頭発表をもとに、発表者（ロバート・Ｆ・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛）が発表原稿を英語やフランス語で論文化している。フランス語以外の原稿をフランス語に翻訳する作業が進められている。

◇2012年８月31日から９月２日にドイツ・デュッセルドルフで開催された第16回ヨーロッパ真宗学会（The 16th European Shin Conference）に、藤枝真研究員（本学准教授）が参加し研究発表を行った。ドイツ「惠光」日本文化センターを会場にしたこの学会は、国際真宗学会（International Association of Shin Buddhist Studies, IASBS）と国際仏教文化協会（International Association of Buddhist Culture, IABC）が共催するかたちで開かれ、ヨーロッパをはじめとする世界各国から50人を超す参加者があった。

今大会は"The Importance of Sangha"（サンガの意義）が共通のテーマとして掲げられ、それぞれ主催する組織の主旨に合わせた発表が行われた。全日程のうち、８月31日はIASBSの支部会として位置づけられており、ドイツ「惠光」日本文化センターの青山隆夫師およびIASBS会長のケネス・タナカ氏の挨拶に続いて、各50分の発表時間（質疑応答10分を含む）で学術的な研究発表がなされた。真宗学、仏教学、心理学など、様々な研究分野からの発表があるなかで、藤枝研究員は、"Sangha and its Participation in the Public Debate on the Issue of Brain Death/Organ Transplantation"（脳死・臓器移植問題に関する公的議論へのサンガの寄与）というタイトルで、生命倫理をめぐる宗教的言説の性格が変化していく様子を発表し、議論の多元的な性格を保つためにサンガが発言する重要性を強調した。

◇村山保史氏（本学准教授）、廣川智貴氏（本学准教授）、藤枝真研究員（本学准教授）によって、マールブルク大学神学部Dietrich Korsch教授のLuther:Eine Einführung（Mohr Siebeck）の翻訳が進められている。全体の訳が一度完了し、その検討作業が続けられている。

〈東アジア班〉

◇中国社会科学院歴史研究所の共同研究

①2012年７月30日(月)～８月２日(木)、桂華淳祥教授、松川節教授が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

○石刻史料から見た金代仏教と帝室　桂華淳祥　教授

○パスパ文字モンゴル文ウサギの年聖旨碑片について　松川節　教授

②2012年９月24日(月)～30日(日)、中国社会科学院歴史研究所から、林存陽研究員、陳麗萍助理研究員、烏雲高娃副研究員を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

９月25日(火)　午後４時～６時　マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）

○清代学者の師友観　林存陽　研究員

○敦煌石窟壁画中の婚姻資料―弥勒経変を中心に―　陳麗萍　助理研究員

○洪武本『華夷訳語』の漢字音訳の規律　烏雲高娃　副研究員

西蔵文献研究

《研究打ち合わせ》

◇４月11日(水)　16時20分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

議題：前年度の活動記録の確認。今年度の研究班の体制および活動予定の確認。

◇５月９日(水)　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

議題：研究業務の進捗状況の確認。

◇６月６日㈬　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認。嘱託研究員・西沢史仁氏より、『サンプ明鏡史』の概要についての解説、同文献の校訂テキストおよび和訳・訳注作成の進捗状況について報告があった。
◇７月10日㈫　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認。
◇10月３日㈬　16時30分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議題：研究業務の進捗状況の確認。研究員・三宅伸一郎より第５回北京国際チベット学セミナーへの参加報告、嘱託研究員・清水洋平氏よりチェスター・ビーティー図書館での調査および第14回ヨーロッパ東南アジア考古学者協会国際会議への参加報告があった。

《研究会》
◇９月28日㈮、９月29日㈯　10時～（響流館３Ｆ演習室１）
『サンプ明鏡史』の研究
嘱託研究員・西沢史仁氏をお招きし、『サンプ明鏡史』のゴク翻訳官の後継者たちに関する箇所（８ｂ－９ｂ）を、氏が作成した校訂テキストおよび試訳を検討する形で読み進めた。学内外からの参加があった。
◇10月５日㈮　13時～（真宗総合研究所内）
寺本婉雅日記の研究
嘱託研究員・高本康子氏をお招きし、寺本婉雅の日記のうち1899年９月から1900年９月までの記録である『新旧年月事記』（内題）の原本を確認しながら、不明瞭な箇所等を確認し、翻刻の確定作業をおこなった。

《資料撮影》
◇2012年９月３日㈪～９月13日㈭（図書館）
パーリ語貝葉元梱包布地等の撮影。

《出張》
◇2012年７月31日㈫～８月５日㈰
出張者：三宅伸一郎（研究員）、白館戒雲（ツルティム・ケサン　嘱託研究員）
出張先：中国・北京
８／１～８／４に中国蔵学研究中心（北京）の主催で開催された第５回北京国際チベット学セミナーに参加。白館氏は「前伝期仏教発展史」との講題で８／２に基調講演、三宅は「キャントゥル＝ナムカ・ギェルツェンの生涯とそのポン教史年表」との題目で３日に研究発表をおこなった。
◇2012年９月15日㈯～９月21日㈮
出張者：清水洋平（嘱託研究員）
出張先：チェスター・ビーティー図書館（アイルランド・ダブリン）
チェスター・ビーティー図書館所蔵のパーリ語貝葉文献の調査と第14回ヨーロッパ東南アジア考古学者協会国際会議（The 14th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists）への参加。会議では特に、東南アジアの写本研究に関するパネルに参加。
◇2012年10月19日㈮～10月21日㈰
出張者：三宅伸一郎（研究員）、白館戒雲（ツルティム・ケサン　嘱託研究員）、永藁知也、稲葉維摩（研究補助員）
出張先：筑波大学・筑波キャンパス
10/20に筑波大学・筑波キャンパスで開催された第60回日本チベット学会大会に参加。10/21には同じく筑波大学・筑波キャンパスで開催された国際シンポジウム「後伝期における周辺地域からチベットへの仏教文献と思想の伝承」に参加。

大谷大学史資料室
＜研究会参加＞
全国大学史資料協議会西日本部会2012年度第２回研究会
日　程：2012年７月13日
場　所：岡山県立記録資料館
参加者：吉田仁美

全国大学史資料協議会2012年度総会ならびに全国研究会
日　程：2012年10月10日～10月12日
場　所：同志社大学今出川校地
参加者：釆睪晃・吉田仁美

＜ミーティング＞
2012年５月31日　15：30～17：30
出席者：釆睪晃・戸次顕彰・吉田仁美
場　所：真宗総合研究所
内　容：大谷大学図書館における大学史資料室スポット展示の企画

＜大谷大学史資料室スポット展示の作業＞
2012年７月11日　10：00～10：30
参加者：戸次顕彰・吉田仁美
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース
内　容：安居のための展示の撤収作業

前頁活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

■人事（2012年10月１日付）

□特別研究員

＊シュローダー・ジェフリー（Schroeder Jeffrey W.）

研究期間：2012年10月１日～2013年９月30日（新規）

研究課題：死後の生命：清澤満之と真宗仏教の20世紀の近代化

指導教員：福島栄寿　准教授

おわび

『研究所報』No.59(pp.16-17)に掲載された2010年度一般研究成果概要「オリヤー文字サンスクリット貝葉写本調査」（研究代表者・山本和彦）は、ダシュ・ショバ・ラニ研究員が獲得した学外の研究資金による研究成果および当該研究期間外の研究成果（「インド東部・オリッサにおける貝葉写本の研究動向」（『研究紀要』No.29, pp.239-255）に関するものでした。関係各位ならびにダシュ研究員にご迷惑をおかけしましたこと、深くおわび申し上げます。

なお、当該研究期間の成果報告につきましては、ダシュ・ショバ・ラニ研究員による「スリランカにおける貝葉写本研究の現状」（『研究所報』No.57, pp.18-19）をご参照くださいますようお願いいたします。

真宗総合研究所長　　浅見 直一郎

研　究　所　報　第 61 号

2012年10月１日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143　京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435

©2012 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute